

中世ロシア文学図書館(XII)

中世ロシアの説教③

トゥーロフのキリルの説教

三 浦 清 美

The Medieval Russian Library (XII)

Sermons of Kirill of Turov

Kiyoharu MIURA

Abstract

The present author publishes 7 preaches of Kirill of Turov (1130- some time after 1182): “A sermon on human soul and body”, “A sermon on white priest and being a monk”, “Archimandrite Vasily’s epistle on Schema monk”, “A sermon on the Willow Sunday”, “A sermon on the New Sunday after the Easter”, “A sermon on the Descent of Christ from the cross”, “A sermon on the weakened”. Kirill of Turov was born of one of the rich and educated families of Turov, an ancient town of Kievan Rus’, now located in Belarus’. He was trained in the disciplines of Christianity, mastered languages, including Greek, and was later appointed Episcopate of Turov. He was an excellent preacher called “Johannes Golden Mouth” of Kievan Rus’. His sermon were dynamic depiction of the essence of Eastern Christianity. The contemporary political situation involved him in the struggle for power against Andrei Bogoljubucky, an influential politician of the time. Kirill was on the side of Kievan and Turovian prince Yuri Yaroslavich and reproached Andrei for his political ambitions, including his attempt to deprive the patriarchate of Constantinople of the control over the religious community of Kievan Rus’, particularly the episcopate of Rostov.

人間の魂について、肉体についての講話	3
白僧と修道士たることについての講話	10
スヒマ僧についての修道院長ワシーリイへの書簡	16
柳の日曜日についての講話	18
復活祭のあとの新しい日曜日の講話	21
キリストの身体十字架降下についての講話	24
病気で弱った者についての講話	30

はじめに

本稿においては、12世紀キエフ・ルーシの説教者トゥーロフのキリルの7つの説教を取り上げ、その注釈とともに翻訳を掲載する。トゥーロフのキリルは、中世ロシアの説教②（『電気通信大学紀要』24巻）で取り上げたキリスト教黎明期11世紀の説教者イラリオン、中世ロシ

アの説教①（『電気通信大学紀要』22巻）で取り上げた13世紀のウラジーミルのセラピオンとならんで、キエフ・ルーシの代表的な説教者である。

トゥーロフのキリルは、ダイナミックな劇的展開をもつ説教によって、キリスト教の本質を同時代のキエフ・ルーシの聴衆に語りかけた説教者で、たとえば、『病気で弱った者についての説教』では、イエス・キリストの人性を強調し、キリストが人間となって人類の罪を引き受けたことにより、人類は救済されていることを説いた。そのほかにも、北東ルーシのアンドレイ・ポゴリュプスキイ公がロストフ主教座を傀儡化し、ビザンツ伝来の「アウトクラトル（天上の神の地上における代理人）」の概念を用いてルーシの統一を図ろうとしたことに反対の意を表し、それを神への冒涇と位置づけて翻意を促したことは、『人間の魂について、肉体についての

講話』からはっきりと読み取れる。キリスト教の教義を演劇化することによって聴衆にわかりやすく訴えかけたことが、その最大の特徴である。ロシアのキリスト教が西欧のキリスト教と異なっていることはしばしば指摘されるが、イコン崇敬に顕著に見られるように、その差異の中心的部分は、キリストの人性の強調（人だから絵に描ける）にあると思われる。トゥーロフのキリルの説教におけるキリストの人性の強調も、明らかにこのビザンツ的な精神的な思潮のうえにある。トゥーロフのキリルの説教を日本語に翻訳することは、西欧と異なるビザンツ的なキリスト教の本質を理解するうえで意味がある

〈解説〉

トゥーロフのキрил（1130-1182以後）は裕福な家族の生まれで、若年から「書物の精読」に没頭して、自国と外国の文筆家に学んでこの当時の最高の教養を身につけていた。ギリシア語を含む諸外国語に通じ、中世の諸科学を研究し、説教の言葉の技を比類なく習得した輝かしい説教者であり、ロシアの金口ヨアンネスと称えられた。世俗の生活から修道院に入り、禁欲生活に我が身をささげたが、時とともに同時代の思想的、政治的闘争に巻きこまれることになった。

キрилは、キエフとトゥーロフの公、ユーリイ・ヤロスラヴィチの側に我が身を置き、ユーリイの意向によって、キрилがその場所で生まれ、すべての生涯をそこで送りそこで終えたトゥーロフの主教（1169頃-1182）になった。キрилの手になる、あるいは、キрилによるとされる多くの作品が残された。ここに刊行されるのは、基本的なジャンル、社会評論的な「談話」と雄弁的な「講話（説教の散文）」の作品群である。キрилはこれらのジャンルで仕事をし、名声を博した。確実にキрилのものとわかる「講話」は、8つ伝存している。キрилと同時代の政治、教会の活動家への書簡、聖者たちへの勤行奉文、祈祷文も残されている。

中世の作品の宗教的なかたちと、中世の作家たちによって聖書から豊富に取材された事実という宗教的外皮のうらには、作家と同時代の社会生活の現実がある。それは、昔から聖書から行われてきた引用を驚くべきかたちで歪める、社会的文化的傾向との激しい戦いである。喫緊の問題を述べるにあたって、伝統的な主題を用いることによって、ある意味では、一般化の要素が導入され、出来事の典型性が強調され、取り上げたテーマの切実さが根拠づけられ、多くの人々の理解を可能にする伝統的な芸術的な手段を用いて、独創的な芸術作品が創作されることになった。

芸術家の人格も、独自の意味を持っている。大部分の中世ロシアの作家たち、引用者たちは、自らの作品を創作するにあたって、一定のモチーフと構成を組み合わ

せることしかしていなかった。だが、キрилは独創的な思想家であり、芸術家であった。おそらくデルジャヴィンにいたるまで、倫理感覚のこのような力、意義、高みをもった作家は現れなかった。キрилは、自らの容易ではない嵐のような時代の良心であった。キрилは、意味と感覚においてポリフォニックなテキストの創造のために、伝統的な詩的手段を繊細に用いた。ここでは、善と悪との終わりなき戦いを描き出すにあたって、高尚な側面と卑近な側面が混在している。

『人間の魂と体についてのたとえ話』は、『盲人と跛子についての物語』というもう一つの名称をもっている。聖書外典の例え話は、作者によって、作品の芸術的なテクスチャーのイメージの基盤として用いられている。この基盤のうえで、精神的なものと肉体的なもの、人間と人間の生活における天上の（高い）ものと地上の（低い）もの、人間存在にとってなくてはならないが、たがいに相反するものとしての思惟と活動という哲学的な問題が検討されている。徹底的な弁証法的な論争が、物語の思想的な意味を構成している。しかしながら、すでに述べたように、この12世紀の作家にとって、物語の思想的な意味をともなう神学的な難問は、論争するにあたって議論になりえなし、じっさいに議論となったのである。

本物の芸術家として、キрилは聖書に材をとったスコラ学的な類推だけにとどまっていたわけではなく、長編小説における登場人物のように、少なからぬ登場人物の、行動のニュアンスを繊細に描き分けているため、人間の心理学にも訴えかけるものがある。登場人物たちは、あるいは、跛と盲であったり、悪霊たちであったり、作者として逸脱をおこなうキрил自身であったり、名前が挙げられていないが同時代人々々にとってよく知られた人物、たとえば、アンドレイ・ボゴリュプスキイ公（跛）とその主教フョードル（盲）であったりする。

物語の目的は、その当時喫緊の問題であった、聖界の権力と俗界の権力との相互関係にかんする社会評論的な議論である。キрилは、「新しい君主」という思想の支持者として登場する。モンゴル・タタール侵寇直前の時代において、ルーシの統一への呼びかけは愛国的なものであったし、すべての進歩的なその同時代人たちは、キрилとこの思想を共有していた。

かくして、ウラジーミル公とロストフの主教の、自分たちの時代にとって差し迫った行動は、すべてのルーシの人々に向けられたキリルの思索の一つの動機となったのである。テキストは何人かの受取人をもっていた。このために、まったく同じテーマが緩やかで控えめな変化をともなうことになる。フョードルにたいする書き方は、アンドレイにたいする書き方とはまったく異なっており、広範な世俗人々にたいしては、また違う書き方をしている。それは、ぎりぎりまで、論理と芸術の極限までき

つく巻かれたゼンマイである。

たとえ話という民衆のジャンルは、直線的な解釈から自由なサブテキストを創造するのを許していたがために、自由なテーマの展開に寄与している（ちなみに、物語の最古の写本によって私たちの時代まで伝わる、「解釈」、「比較」などの言葉じたいは、おそらくはキリルが使ったものではないだろう）。

神学的部分で用いられる教会関係の知識は、キリスト教の知識に乏しい者でもわかる最低限のものであり、時間が経つにつれて広く民衆の神話のなかに浸透していった。たとえば、神が雨を降らせるとか、神は不正な者を罰するとか、魂が死者の身体から離れる、などの表現がそれである。これは神学者たちの論争とは異なっており、民衆の異教、原始キリスト教、中世の芸術家の知的レベルなど、いくつかの独立した神話体系を一つに結び合わせる試みである。かくして、12世紀の人々の風俗、道徳、希望についての数多くの間接的な情報によって、物語はさらに価値のあるものとなっている。

これはまったくの「作者による」作品であり、12世紀としてはきわめて例外的な現象である。キリルは、まず神話的、歴史的類推を構成することによって、その特徴となっている解釈や比喻によって、自らの姿をあらわすが、それと同時に、読者に直接呼びかけてもいる。その呼びかけのなかで、自分の物語の意義についてはっきりと述べ、創造的に「自らの理解をもって」聖書を読みこむことが必要である、という完全に異端的な考えを表明している。そして、聖書のなかに人々の止むにやまれる行動と事件の前例を求めようとするのである。

キリルのほかの作品でも、叙述はいくつかの側面で同時に行われている。その側面とは、具体的現実的な側面（主題の叙事詩的な根幹）、教導的あるいは論争的な側面、そして、人間の一般的な、世界と人間生活の時間外的な価値を反映する象徴的な側面である。テキストとサブテキストは、作者にあって、テーマと構成の共通性で統合されているが、言語の面では文体的に対置されている。キリル作品の研究者であるИ.П.Ериョーミンは、すべての叙述を検討しながら、キリルの講話の文体の基本的な原理は、修辭的な増幅であると考えた。テーマは言葉のうえで絶え間なく変容し、いっそう新しい登場人物と引用を含むことによって拡大してゆき、いっそう新しいテーマの根拠が引き寄せられ、テーマの内容が汲みつくされるということはないのである。テーマは、自らのあらゆる意味的な、感情的な陰影のなかで、それは言葉の多義性のなかで、正確な現実の細部が用いられて、並は

ずれて絵画的に展開されている。モンゴル侵襲以前には、こうした言葉をもつことができた作家は、キリル以外にいなかった。

キリルは伝統に則って大部分の主題をよく知られた資料（それらを数え上げれば、キリルがその当時の文学、歴史、学問をよく知っていたことがわかるだろう）から借用していたが、その活用の仕方は独創的であった。死んで生き返る神についての主題（『柳の日曜日についての講話』）であったり、罪と罰についての主題（『盲と跛についての物語』）であったりするが、キリルは世界文学の永遠の主題に新たな生命を吹き込むことができる作家であった。

キリルの修辭的作品のなかで、民衆の創作のいくつかのジャンルとの結びつきを縦横に反映している講話がここで公刊されている。キリルの民衆の創作の諸形態を巧みに自らの作品に生かしている。民衆の泣き歌、論争における哲学的な言説、靈感にあふれた預言が、事件の叙事詩的な前後関係のなかに、じょうずに編みこまれている。キリルの中世ロシア語の繊細さ、豊潤さと、彼の散文の過敏で不規則なリズムを完璧に現代ロシア語で再現することはほとんど不可能である。であるから、読むにあたっては原典テキストを注意深く追っていくことが必要である。

H.A. コーレソフ

〈翻訳〉

人間の魂について、肉体について、神の教えへの背き、人間の肉体の復活について、来る裁きについて、苦患について¹

主よ、祝福したまえ、父よ

兄弟たちよ、神の書物の教えを理解することは私たちにとって善いことであり、たいへん有益なことです。それは、魂を純潔にし、頭脳を謙遜に導き、心臓を善行への渴望で満たし、人間自身を感謝にあふれるものとし、思いを天上の主との誓いに馳せ、身体を精神の努力に耐えうるものに鍛え、この世の生、この世の名誉、この世の富を軽蔑させ、この世のあらゆる悲しみを取り除きます。

そのゆえに私はあなたたちをお願いいたします。熱意をもって聖なる書物を精読することに努めなさい。そうすれば、わが身は神の言葉で満たされ、来る世の得も言われぬ福をわがものにしたいという強い気持ちをもつことができるでしょう。それは目に見えずとも、永遠で尽

¹ 『人間の魂と肉体についてのたとえ話』（『盲と跛についての物語』）Притча о человеческой душе и теле (Подготовка текста, перевода и комментария В.В. Колесова) // Библиотека литературы Древней Руси. (Дальше БЛДР) Т. 4. С. 142-158, 604-607. По изданию: И.П.Еремин. Литературное наследие Кирилла Туровского // ТОДРЛ, т. XII. М.-Л., 1956, с. 340-347.

きることがなく、堅固で揺るがぬものでしょう。流暢に書かれたことを唱えるだけでなく、分別をもってよく聞き、書かれていることを行動に移すように努めましょう。というのは、蜜の蜂房は甘く、砂糖も素晴らしいのですが、この二つよりも書物の知はもっと素晴らしいからです。それは、永遠の生の宝庫なのです。

誰かが地上の宝を見つけたとしても、それを全部自分のものにしようと思う必要はありません。たった一つ貴重な宝石を取ったとしても、それですでに困窮もなく食べていくことができるでしょうし、富は生涯の終わりまででなくなるでしょう。同じことが神々しい書物の宝庫を見出した者についても言えます。それが預言者の書であれ、詩篇であれ、使徒行伝であれ、救世主キリストさまご自身のお言葉であれ、それを見出した者は、分別をもったほんとうの知性ももっているものであり、すでに自らに救済をもたらすことができるだけでなく、それを聞くほかの多くの人々を救うことができるのです。

こういう者は、福音書のたとえ話の場合と非常によく似ています。「天の王国が何たるかがわかっている文筆家は、家政の切り盛りが上手な男に似ている。その男は、自らの宝物庫のなかから自在に、古いものと新しいものを出す。」もしも虚栄心から富栄える者にへつらい、貧しいものを馬鹿にし、図々しくもご主人様のムナ²を隠し、人間の魂であるところの天の銀を2倍にするために、生活という市場に委ねることをしないならば、主はその傲慢な心をご覧になり、彼からその1タラントを取り上げられるでしょう。³ なぜなら、主は高慢な者たちに敵対し、柔和なる者たちに恩恵をほどこすからです。

もしもこの世の支配者たちが書物に学び、全知全霊を傾けてその知恵を汲みつくそうとしたならば、生活の労苦にあくせくする者たちが熱心に書物の教えを欲したならば、なおさらのこと、私たちには、私たちの魂の救済について書かれた神の言葉を深く学ぶことが、ふさわしいといえるでしょう。私は頭が悪いので、私の心をどんなに一生懸命働かせても、必要な言葉を順序よく述べる

ことができません。盲撃ちの射手のようにあざ笑われるのが関の山です。だって、的に当たることはないのですから。ですから、言うことの聞かない舌を動かすことはやめて、聖書から言葉を引くことにいたします。大いなる畏敬の念をもって、福音書の言葉についてお話することにいたしましょう。まず手始めに、マタイが教会に伝えたとおりに、主のたとえ話⁴をすることにいたしましょう。

はじまり。主は仰せられました。ある家政の上手な男がいてぶどうの木を植えてぶどう園を造りました。ぶどう園に壁をめぐらせ、穴を掘ってぶどうの压榨機を据え、出入り口を設け、門をしつらえましたが、門は閉めませんでした。自分の家に戻る途中でこの男は考えました。「自分のぶどう園の門番を誰にしたらよいだろうか。もしも私に仕える奴隷を門番にしたなら、連中は私の温厚な性格を知っているので、私の富を損なうようにふるまうだろう。だが、私はこうすることにしよう。門番として跛と盲を雇うことにしよう。私の敵のだれかが私のぶどう園に盗みに入ろうとしたら、跛は見ることができるし、盲は聞くことができる。2人のうちの誰かがぶどう園に入ろうという気を起こしても、跛は足を使って中に入ることはできないし、盲は中に入ったとしても、迷って穴に落ちて死ぬのが関の山だ。」この2人を門番にして、すべての外の者たちにたいする権力を授け、食べ物も着る物も何不自由なくあたえました。この男は言いました。「私の命令なく、中のものに触らせることだけはまかりならぬ。」このように言うのと立ち去って、ときどき彼らのもとに来て見張りの報酬を取らせることを約束し、もしも言いつけに背いたときには厳罰に処すと脅しました。⁵

さて、とりあえず話はここでやめて、福音書の言葉に立ち戻りましょう。福音書の言葉は、知恵の饗宴で言葉の果実をあなたがたの目の前に差し出すでしょうから。

答え。家政の上手な男は、すべてを見備わす全能の神のことです。神はロゴスで、見えるものも見えざるもの

² ムナ銀貨。『ルカによる福音書』19章12-26節によれば、主人は3人の奴隷に、自分が不在のあいだ、市場で投資をするようにと、10ムナの銀貨を渡した。ある奴隷は、そのムナを10倍にし、別の者は5倍にしたが、3人目の奴隷は受け取ったお金を、布に包んでしまっておいた。

³ 『マタイによる福音書』25章14-30節によれば、主人は3人の奴隷に8タラントの金をわたしたが、そのなかの1人が自分の取り分を投資せず、地中に埋めた。この奴隷は、厳しく罰せられた。

⁴ この物語の叙事詩的基盤には、古代の東方にさかのぼる、盲と跛についての古いたたとえ話がある。学者たちが考えるところによると、この話はタルムードの『アントニン皇帝とラビ』で、『千夜一夜物語』、『ローマ人たちの事績』など、世界文学の多くの作品において現れている。スラヴ語版が現われたのは、10世紀の東ブルガリアで、中世ロシアでも広く知られていた。キリルの叙述においては、その意図と論証のシステムとともに、福音書のたとえ話にある様式化が認められ、『マタイによる福音書』21章33節、12章1-2節からの頻繁なテキストの借用があり、盲と跛のたとえ話とは、表層的な類似しかない。

⁵ 「中のもの」と「外のもの」の対比は、物語のテキスト全体を貫いている。作者はテーマを展開しながら、たえまなくこのアンチテーゼを豊かにしてゆく。そのさい、中世ロシア語におけるこれらの言葉の多義性を用いている。外なるものは、形態であり外面であり他人であり教会でありエデンの園であり世俗であり異教であり闇であるが、内なるものは、内容であり内在であり認識であり自己であり祭壇であり教会的なものでありキリスト教的なものであり光である。翻訳では、毎回、対応するコンテキストにおける語の文字どおりの意味を付与している。

もすべてのことをおこないます。聖書によれば、家政が上手な、と言われるのは、ただ家をもっているからだけではありません。預言者はこう仰せです。「天空も大地もそなたのもの。そなたは、宇宙とその極限をお造りになった。」また、「空は私の玉座、大地は私の足台。」モーセは、大地のしたに水の底があることを知っており、ダビデは空より高く水を持ちあげました。聖書をごらん下さい。そして、理解なさるがよろしい。被造物においてだけではなく、人間においても、あらゆるところに神の家があるのです。神は仰せです。「私はこれらの者たちのなかに住んでいる」と。

このとおりのことが起こったのです。神は降り、人間の肉体に住まい、人間の肉体を地から天に引き上げました。人間の肉体が神の玉座となったのです。空高い天にその玉座があります。ぶどう園を植えたのだから、それは天国だと言われるのです。それは、神の労働の実りだからです。聖書にはこう書かれています。「神はエデンに天国を据えられた」と。ぶどう園には、自らへの畏れという壁をめぐらせたのです。預言者は言っています。「神への畏れによって、大地は動き、巖が崩れ落ち、生き物は慄き、山は煙に包まれ、星々は奴隷のように仕え、雲と大気は被造物は命ぜられたことをおこなう。」壁は律法であると言われる。律法は神の戒めです。というのは、こう言われているからです。「私は境を設けた。この境を越えてはならぬし、この境を動かしてもならぬ。」

入り口を設けたというのは、すなわち、知を授けたということでしょう。あらゆる被造物は、神のご命令に背いてはならないのです。こう言われています。「すべてのものをそなたから待ち望む。そなたは、人間たちにちょうどよいときに食べ物をおあたえになる。」食べ物とは、パンのことを指すものではありません。それは神の御言葉です。すべての被造物は神の御言葉で養われるのです。モーセは言っています。「人間はただパンのみに生きるのではない。神の唇から出るあらゆる言葉によって生きるのだ。」

閉じられない扉とは、神の驚くべき被造物の秩序であり、被造物がもつ、神はおられるという認識です。被造物から造物主を知るがよろしい。造物主とは何かと問うてはなりません。その偉大さ、力、誉れ、恩寵を理解するのがよろしいのです。神は、高きもの、低きもの、見えるもの、見えざるものに見合うように、すべてを創造されたのです。なぜなら、キリストを人間と呼ぶのなら、それは見かけが人間であるということではなく、寓喩的な意味合いにおいてだからです。人間は、いかなる神の似姿をももつことはできません。聖書は迷うことなく人間を天使と呼んでいますが、それはあくまで言葉においてであって、似姿においてではありません。もしもモー

セが「神は言った。人間を私たちに似せて、その似姿において創造しよう」と言うのを聞いて迷う人がいて、尋常なる理性をもたぬ身体を肉体なきものに比するならば、その者たちは、神を人間に似たものと考え人々において、今にいたるまでそうであるように異端なのです。神は、言葉で言い表すことができないし、どのような性質をもっているか、その輪郭を示すことはできないからです。ですが、この話はもうやめて前の話に戻しましょう。

家に帰りながら、「私の労働の実りを見張らせるために誰を見張りに立てればよいだろうか」と考えたわけですが、父と子と聖霊のこの質問は、被造物についてのもではなく、被造物を支配する者、すなわち、主についてのものでした。この主人にこの大地と生きとし生けるものすべてを服従させたいとお考えになったのです。宇宙やそのほかのものをゆだねたのは天使たちではなかったのです。

「門には跛とそれとともに盲を置こう」と言いましたが、それでは、跛とは何でしょう、盲とは何でしょう。跛とは人間の肉体です。盲とは人間の魂です。はじめ、神は魂を入れずにアダムを肉体をおつくりになりました。魂を造られたのは、そのあとのことです。肉体を造ったあとに、聖書は次のように言っています。「その顔に生きた息を吹き入れた。」だからこそ、魂のない肉体は跛であり、人間とは言えず、死体にすぎません。ここで、聖書を見てそれを理解するのがよろしいでしょう。

神は楽園の外で肉体をお造りになり、楽園ではなくエデンに運び入れたのです。エデンとは、すなわち食べ物のことです。宴会に人を呼ぶ者は、まずはじめに、おびたしい食べ物を用意し、そのあとにはじめて呼ばれた者を招待するものです。同じように、神はまずはじめに、エデンという住まいを造りましたが、それは楽園ではありませんでした。楽園は、教会にとって祭壇がそうであるように、神聖な場所です。というのは、教会になら誰でも入ることができます。教会は、私たちにとって母ですから、洗礼によってすべての者を圧倒することができます。そのなかに生きる者たちに食べ物をあたえ、着るものをあたえ、住む場所をあたえることも難しくありません。

というのは、預言者が次のように仰せられているからです。「教会に仕える者たちは、食べ物をあたえられ、お腹いっぱいになる」と。また、次のように言われています。「おお、教会の子らよ、乳首から乳脂と乳を吸う者は、自らの頭を飲むで満ちすがよい。」ダビデはまたこう言っています。「そなたの家の豊かさでたっぷり飲み、そなたはその食べ物の奔流で彼らに目一杯飲ませる。」そしてまた、聖職者たちの衣服と修道士たちの身なりについては、次のように言っています。「主よ、そなたの僕たちは真実を身にまとう。」などなどです。修道士にたいしては、「主は、私から貧しいみずぼらしい

衣服を脱がせ、私に救済という着物を着せ、喜びという帯を締めさせた。」

大きな声で主に新しい歌を歌うがよろしい。教会のなかで、主の慈悲深さを讃えるがよろしい。というのは、じっさいに以下のことが明らかだからです。合唱隊員聖職者から主教が出て、修道院から修道士が出るのです。さあ今こそごらん下さい。⁶ 主教区と修道院こそがエデンなのです。すなわち、エデンの楽園です。門が閉まっていなかったとしても、入ることはむずかしいのです。

このようなわけで、跛は盲とともに中のものを見張るために門番に据えられたのです。それは、キリストの敵から神聖なる秘密を守る番をするために、総主教や大主教や修道院長に任命されるのと同じことです。キリストの敵というのは、異端者であり、悪い信仰をもつ誘惑者であり、冒瀆的な罪を重ねる者たちです。注意深く聞いてください。順序立ててお話することにしましょう。あなたがたは、注意深く見てください。私は頭が悪く、言葉の使い方も下手なのですが、あなたたちの祈りに期待して、言葉の恵みを望むことにいたしましょう。私はこういうことについて話す資格がないのですけれども、聞く人々のためを思ってあえて書くことにしましょう。生まれつき耳が悪くても、自分に何が得になるかを探し求めたりせずに、私たちの何が悪くて責められているのか、何のために自分たちが非難されているのかをよく考えることはできるものです。

このように2人が座りはじめて幾ばくかの時が経ったとき、盲は跛に言いました。「何という芳香が、門のなかから私のほうに漂ってくるのか。」跛は答えました。「俺たちのご主人は、何という素晴らしいものを門のなかにもっているのか。それを食べると、得も言われぬ甘い味がする。だが、俺たちの主人はものすごく頭が良いので、ここに盲であるおまえと、跛である俺とを門番にして、その素晴らしいものを味わわせないようにしたのだ。」すると、盲は答えて言いました。「どうしておまえは長いこと、そんな大事なことを言わなかったのか。俺たちはこんなに長い間待ちつづける必要はなかったのだ。俺は盲だが、足があるし力も強い。俺の足はおまえも荷物も運ぶことができる。」魂の主には罪であることがお判りでしょう。これがゆえに、預言者は「重い重みが私を苦しめる」と仰せなのです。「背負子をもって来て俺を乗せるがよい。俺はおまえを担ぐ。おまえは俺に

道を示せ。俺たちの主人が所有する、素晴らしいものを手に入れようじゃないか。俺が思うに、俺たちの主人はしばらくここにやって来ないと思うのだ。」

こういう考えは、神に拠らずこの世の位を求める者に特有のものであり、そうした者は肉体のことだけを思い煩い、自分の行いのために報いを受けるとは、夢にも思わないものです。⁷ はかない湯気が風に吹き散らされるように、自分の魂を風に晒してしまうのです。このゆえにイザヤは言っています。「物のわからぬ人々は羨望に囚われる」と。私たち罪深き者は正しき者の名誉と誉れを羨み、彼らの行いをまねぼうとはしません。「もしも私たちの主人が来たら、俺たちの行いを主人から隠せばよいだけのことだ。もしも盗みの疑いをかけられたら、俺はこう答えるだろう。『ご主人様、あなたもご存知のとおり、私は盲です。』おまえが訊問されたときには、『私は跛です。あそこにたどり着くことはできません』と言うがよい。俺たちはよろしくやって見張りの報酬にありつこうじゃないか。」跛は盲の背中に乗って、自分たちの主人の内側のすべての物を盗んでしまったのです。

兄弟たちよ、私のがさつさ、書きぶりのまずさに腹を立てないでください。鳥の足を縛ってしまえば、空の高みに飛び立つことができませんが、それと同じことで、肉体の欲求に縛られている私は、魂のことを語ることができないのです。聖霊の恩寵を失ったままで、罪深い言葉はその目的を達することはできません。それでは、前の話に戻りましょう。この例え話の意味するものを明らかにしたいと思います。

解釈。2人は長いあいだ座っていました。長いあいだとはいったい何のことでしょうか。神の戒めに恐れを抱かないこと、肉体のことに思い煩うこと、自らの魂に無頓着なことです。なぜなら、誰もが神の戒めに畏怖を抱かず、肉体のことで惑わしを受けているからです。正しい信仰をもっているならば、掟を守りながら聖職者の位を得ようと望む者はいないでしょう。死を望む者で、死後の復活を望まぬ者はいないでしょう。そういう者たちは、悪事にはまりこんでいるのです。しかしながら、私はふたたび叡智のためにものを申し上げます。

盲は跛に言いました。「門のなかから漂ってくるこのよい匂いは、いったい何だろう」とか、そのほかいろいろなことを言いました。それは、アダムの高慢が風に乗って漂ってくるのです。アダムは地上のすべてのものの、

⁶ 対論者に対する呼びかけ。これから物語は議論に入ることを示すために用いられている。

⁷ ロストフ主教フェオドルが高位の聖職を求めたことを論難している。年代記は、このフェオドルを「異端者主教フェオドレット」と表現している。フェオドルは、アンドレイ・ボゴリュブスキイ公の支援を得て、ロストフ主教区をキエフ府主教区から独立させようと試みた。この動きは、キエフ大公権からロストフ・スーズダリ公国を独立させようとした、アンドレイ公の分離主義的な動向と連動している。動乱の世にルーシの権力分散を加速させようとしたこの試みは、社会の反発を買ったが、この反発を代表するのがこのキリルの著作である。主教位の僭称者の篡奪者フェオドルは、キエフ府主教の手にわたされ、1169年異端者として厳しい処罰を受けた。キリルの物語は、フェオドルにたいする非難であふれている。

動物たち、海、海のなかのすべての被造物を所有しながら、エデンで恩寵に満たされ、神のご命令がくだるまゝに、大胆にも聖なるものを目指してエデンから楽園にいたったからです。このために聖書は次のように言っているのです。「神はアダムを楽園から追放され、彼を、彼自身がそこから造られた地を耕す者とされた。」

ごらんなさい。アダムはそこに住むなと命じられ、このゆえに神はアダムを追放されました。というのは、かくのごとくしてアダムが楽園に入ったからですが、それはかの教会人のごとくだったのです。かの教会人は、その聖職位にふさわしくないにもかかわらず、自らの罪を隠し、神の掟を無視して高き名と誉れある生活のために主教の位に登ったのです。

比喩。善悪を見分ける木に触れたがゆえに、アダムは死ぬことを運命づけられたのです。善悪を知る木とは、認識の罪と、神のお気に召すための勝手気ままのことです。というのは、こう書かれています。「罪を犯す知性は禍なるかな。」このゆえに、生命を造る息は神がその顔に吹きつけたものですが、それは聖化の不完全な恩寵なのであって、その息を吹き込むことによって、逆に破滅がもたらされてしまうのです。というのは、こう書かれています。「私はその顔に生の息を吹きつける。」このようにキリストは、使徒たちの顔に息を吹きかけられたのです。「聖霊を受け取るがよい。」聖霊は、すなわち、不完全な恩寵です。聖化の約束にすぎません。だから、使徒たちには、聖霊を待ち受けるように命じたのです。「来る者は、完全にあなたたちを聖なる者とする。」

かくして司祭たちは、副輔祭、読経士、輔祭たちの叙聖をするのであって、それは不完全な恩寵なのであり、自らを最終的な聖性へと準備するための、聖化の約束にすぎないのです。位において上ろうとしないことほど、神にとって善いことはないのですし、神に拠らずして位を得るために、独りよがりな傲慢な尊大さに陥ることほど、神にとって厭らしく映るものはないのです。かの盲

と跛をご覧ください。彼らは主人の戒めと禁止を破りました。盲は跛と重荷を担ぎ、ぶどう園のなかに入って木に近づき、その果実を味わいました。それはとてもおいしかった。かくのごとくして、彼らは番をするように命じられた果実を盗んだのです。

類比。この木を食べた者は、カインです、聖なる者でもないのに、図々しくも聖なる位を望みました。聖なるアベルを妬み、羨望の心から彼を殺しました。コラの息子たちは、ダダン、アビラムとともにこの木の果実を食べました。聖なる者でもないのに、香炉をとり仮殿に入りましたが、地が彼らを飲みこみました。悪賢く魂の道を知っているかのように振る舞いながらも道を踏み外して惑い、悔い改めもせずに死んだ異端者たちもこの木の果実を食べました。⁸ ですが、こんな話はもうやめて、元の話に戻しましょう。

私の舌は疲れましたが、預言者がこう言って私を鼓舞しています。「大声を上げて私は疲れた。私の喉はかすれ声しか出ない。」⁹

罪の告発。主人は、ぶどう園が窃盗にあったと聞いて、門から跛を蹴りだし、盲を見張りから追いだすように命じました。

さあ、もうお判りでしょう。人々のなかでもっともデダラメなお偉い方々よ、聖職者のなかでもっとも愚かなお歴々よ。¹⁰ いつになったら、賢くなるのですか。耳をおあたえになった方が聞こえないことがありますでしょうか。目をお造りになった方が見ええないということがありましようか。もろもろの民族を教え導く方が、見破れないことがありますでしょうか。人間に理性をおあたえになった方が、私たちの墮罪を理解せぬということがありましようか。主はじつに、狡賢い者たちの悪巧みが偽りのものであることをよくご存知ですし、また、不正なる者たちを権力の座から下ろし、罪深い者たちを奉献台から追いはらうのです。この世のいかなる位も、もしも神の戒めを破るならば、苦しみから免れることはできません。で

⁸ 農耕者のカインがその兄で牧畜者のアベルを殺したのは、神がカインからは供犠を受け取らなかったのに、アベルからは受け取ったからである。自らのテーマに対応するように、キリルは人間がおこなった最初の殺人の事実を述べるのではなく、聖なるアベルへのカインの羨望を述べている。ここでは、フェオドルの振る舞いと比較されうる、一連の否定的な事例が挙げられている。たとえば、レビ人のコラ、ダダン、アビラム、オンは、モーセに反抗し、モーセのような聖職者だけではなく、すべての人間が聖なる者であると主張した。このことを調べるために、モーセは彼らに、自分のかわりに祭祀をおこなう提案をしたが、怒った神の言葉によって地は裂けて、彼ら離反者ばかりではなく、その家族、家、財産をも飲みこんだ（『民数記』16章）。また、祭司エリの息子たちは、祈りを捧げる人たちの眼前で、供犠に捧げられた肉を食べたり、そのほかのでたらめな行いをして、信仰の深い人々の感情を傷つけた（『サムエル記上』2章）。

⁹ 詩篇69篇4節「叫び続けて疲れ、喉は涸れ」の不正確な引用。キリルは引用された箇所を、物語の全体的な構造に相応しいものに変えている。

¹⁰ 俗界の高官であるアンドレイ・ボゴリュプスキイ公と聖界の高位者であるロストフのフェオドルにたいする呼びかけである。アンドレイは、フェオドルが処刑された年、11人の公の援助を得て、キエフに軍事遠征をおこない、戦闘の結果、キエフを制圧して破壊、略奪をおこなったが、キエフ大公位にはとどまらず、以前のようにロストフ・スーズダリの独立を志向した。トゥーロフ公国の住人であったキリルが、これほどスーズダリ公の陰謀にたいして神経をとがらせているのは、トゥーロフがスーズダリ諸公とキエフ諸公にたいして二重の従属関係をもっていたことによって説明できる。ルーシ国家を分裂させようとするスーズダリ権力を非難するキリルは、この時代の全ルーシの利害を反映している。キリルはアンドレイ個人あてにも書簡を執筆しているのだが、その書簡は現存していない。

すが、私はあなたたちの愛を頂くことを懇願いたします。細心の注意をもって書かれたことを見、聞いたことすべてをよく考えてほしいのです。

神は樂園から追放されました。というのも、禁に触れてしまったからです。つまり、許されるまえに、聖なる場所に足を踏み入れてしまったのです。神はアダムを樂園の食べ物、すなわち、木の実に座らせました。「手を伸ばしさえすれば、樂園の木の実を食べることができる。永遠の生命を手に入れよう。」もちろん、我に返ることができたなら、謙虚な気持ちになって罪を犯したことを悔いるでしょう。しかしまあ、神の人間への愛はどれほど大きなものなのでしょうか。神はわたしたちを罰すると同時に憐れみます。罪を咎めはしますが、ふたたび悔い改めれば受け容れてくださいます。なぜなら、神は罪人の死を望まず、悔い改めて生きつづけることをお命じになっているからです。

生命の木とはいったい何でしょうか。謙虚な知恵です。その根っこは悔い改めです。「というのは、私の無法を告解しよう。そなたは私の心の不敬を許してくださったのだから。」この根っこから生え出た幹は、敬虔なる信仰です。「そなたへの信仰は、私を救う。」信仰する者へは、すべてがあたえられます。この幹からは、多くの枝が分岐しています。涙、齋戒、清らかな祈り、喜捨、謙抑、ため息など、いろいろなかたちの懺悔があります。これらの枝に、愛、服従、忍耐、謙遜など、さまざまな善行という果実が実ります。救済への多くの道が開けるのです。もうおわかりですね。生命の木があるのは、樂園ではありません。エデンではありません。わが身を追放に処すること、つまりは、位を拒絶することです。カインが兄のアベルを殺したことを知って、神はカインをも追放されました。神はカインを咎め、生命の木を示してこう仰せられました。「呻き、震えよ。」つまり、悪意を、羨望を、欺瞞を、殺人を、虚偽を悔い、謙虚になり、齋戒し、目覚め、地に身を横たえよと仰せられたのです。

しかし、そなたはこれをなさらなかった。神の御顔から身をそむけられました。それは、土地が遠かったためではなく、神への恐れが欠如していたからです。私たちのなかに福なるものがなく、罪にたいする悔い改めがないならば、どんな位にあろうとも、神からは遠ざかっているのです。主が近くにおわすのは、心から悲しむ者のみです。神は霊によって謙抑なる者たちを救いたまい、神を畏れる者たちの望みをかなえられるのです。主は、

悪どい者たちからは顔を背けられます。その者たちの記憶を地上から消し去ろうとなさいます。

かくのごとくして、パウロは神聖なる奉献台からヒメナイとフィレト、¹¹ コリントでみだらな行いをした聖職者たちを追放しました。¹² パウロは彼らを至聖所の隣に立たせ、すなわち、聖なる者たちのなかに置いてこう言ったのです。「彼らに恥を知らしめなさい。ですが、彼らが悪しき家で破滅しないように愛してあげなさい。改悔すれば、生きていられるでしょう。」鍛冶屋のアレクサンドロ¹³は、この生命の木を食べようとはしませんでした。この人については、パウロは次のように言っています。「主は裁きの日にその罪にしたがって報いをあたえられるでしょう」と。エフェソスのトレフィスも、キリストを否認した7人の輔祭のうちの1人でテッサロニキの異教神殿の祭司となったニコラオス¹⁴も、この木の果実を食べませんでした。この2人については、ヨハネがこう言っています。「私たちの仲間から外れ、私たちに敵対した」と。

異端者たちは、この生きたる木を食べませんでした。このゆえに呪われ、魂の死を死ぬことになったわけですが、預言者が「主の幸なのだから、食べ、そして、ごらんなさい」と言っていることを理解しませんでした。というのは、神の慈悲を凌駕する罪はないからです。私たちはユダのように絶望してはいませんし、サドカイ派のように肉体の復活を信じないわけでもありません。¹⁵ 天国への扉が私たちに向って開くまで、悔い改めによって神の扉を叩きつづけます。「叩けよさば開かれん、探せよさば見出さん、求めよさばあたえられん」とおっしゃった神は、嘘を仰せではないのです。ですが、言葉を重ねて書かれたものを嵩増して話をつづけるのは止めましょう。元の話に戻りましょう。

その人間は、自分のぶどう園が盗みにあったのことに気づくと、盲と跛の関係を断とうとしました。まずはじめに盲を連れてきて、誰が自分の戒めを破ったのか、誰が自分の命令なしに中に入っているといけないという言いつけに背いたのか、尋問しました。何ものも神の目から隠すことはできないし、何人も、神が私たちみなを知っているように、私たちのことを知ることはできないからです。

解釈。神は魂を肉体から切り離すことをお命じになっているのです。魂は神のロゴスとなって肉体から出るの

¹¹ 『テモテへの手紙二』において、復活はすでにあつたのだから、世界の終末を待つ必要がないと言ったとされる。

¹² 『コリント人への手紙一』。

¹³ 銅細工職人。『テモテへの手紙二』4章14節。

¹⁴ トレフィスもニコラオスも、聖典とはならなかった文書において、キリストを否認したがゆえに天国に行けなかった人物として現れる。

¹⁵ キリストを裏切ったユダは30枚の銀貨を受けとったが、血の贖いのために神殿に奉獻しようとして祭司たちに拒絶された。ユダは絶望してこの銀貨を神殿に投げて立ち去り、首をくくった。ユダヤ教に一派であったサドカイ派は、死後の復活を信じず、それゆえに死んだ兄弟の妻と結婚することを求めた。

です。「彼らの魂を取り上げてごらん下さい。彼らは消えて塵に戻るでしょう。」肉体が地中に埋葬されるのを見るとき、ここに魂があると思っはなりません。というのは、魂は地中から現れるものではありませんし、地中のなかに潜るものでもないからです。聖者たちの奇跡を起こす遺骸を見たとしても、そこには魂があるわけではないのです。「私を讃える者たちを私は讃える」と仰せられて、自らのお気に入りの方たちを讃える神の恩寵があるだけだ、と理解するのがよろしいでしょう。

主人は、盲は連れて来るように命じました。信仰のある者、信仰のない者、掟に従って生きた者、無法の者、あらゆる人間の魂は、肉体から離れると、それに寄り添う天使とともに、神の御前に現れるのです。「主は、正しい者と罪深い者とを見分ける。」というのは、あらゆる民族は一つの血から生まれ、すべての地の表面で生きるように散らされたのであり、神は、天から降雨をもたらし豊かな収穫の時をあたえることにより、様々な種族に分かれた人間に恩寵をほどこしているのです。「善き者たちにも悪しき者たちにも、己の太陽を輝かせる」などのことが言われているのです。

ですが、誰もこれらの言葉について私たちを非難しないでください。聖書をよく味わい、私が聖書からよく意を汲みつくしたことを認めてください。モーセは書いています。「私は神の天使の数によって諸民族に境目を設けた。」エレミヤは言っています。「ただ主だけが天の下の方民族におわします。」ただ神は彼らのそれぞれを惑いのなかに置き、彼らの魂が自分のまえに現れると、神は彼らの所業によって裁きを下されるのです。パウロはこう言っています。「どうして私は外の者たちを裁くのか。内の者たちはあなた自身が裁きなさい。外の者たちは神がお裁きになる。」

内の者たちと言われているのは、掟のなかにいる者たちです。外の者たちと言われているのは、無法の民族です。今まさに肉体から離れていく魂にとって、神の御名を聞くことはふさわしいことです。最後の日に、魂は肉体とともに復活し、罪なく神のまえに跪くことができるように。いまは悪魔たちの惑わしを受けて奴隷となっている者たちは、彼らにはふさわしくないのです。というのは、使徒はこう言っているからです。「そのときあ

らゆる目を見るでしょう。主イエス・キリストがただお一方、父なる神の誉れのなかにいると信仰告白しながら、あらゆる者が跪く。」

学ぶ者はみな知っていることですが、私は盲のことから説き起こした話を、私の理解がおよぶかぎりにおいて、簡潔に述べました。私に非難の矛先が向けられることも重々承知です。というのは、私の話が叡智ではなく、粗野によるものであることを、私はよく承知しているからです。とはいうものの、キリストを礎石として、預言者と使徒たちの基礎のうえに建設したつもりです。

盲は連れてこられると、尋問が行われました。「私のぶどう園の見張りにおまえを立てたことは、よくないことであつたか。なぜおまえはぶどう園で盗みを働いたのか。」主人に盲は答えました。「ご主人様、あなたは私が盲であることをご存知です。私を導く者がいなければ、私はどこに行ったらよいのか、わからないのです。私が行きたいと望んだとしても、どの場所であれ、行きたいように行ける場所はないのです。私は、誰かが門のそばを通る物音も聞きませんでした。そんな者がいたら、私は大声で叫んだことでしょう。ご主人様、私が思うに、跛のやつが盗みを働いたのだと思います。」さあ、ごらんになるがよろしい。魂は神の御前で嘘八百を並べたて、肉体を譏言しているのです。

解釈。魂の言葉はこのようものでありました。「主よ、私は霊です。食べたいとも飲みたいとも思いません。地上の名誉も誉れも探し求めません。肉体の欲求も知りませんし、悪魔の思惑もおこないません。すべては、肉体がやったことです。」

これを聞くと、自分が葡萄畑に戻り跛を呼び出すまで、主人は盲を、自分だけが知っている秘密の場所に閉じこめておくように命じました。そのとき、2人ともが裁かれることになったわけです。

このために、キリストの再臨まで、信仰のある者にせよ、信仰のない者にせよ、裁きもないし、人間の魂には苦しみもないであります。人間の肉体の復活が真実であると、信じなさい。「自らの霊を送り、一緒になり、地の表を一新する。」『エゼキエル書』において、復活への望みが示されていました。¹⁶「人間の息子よ、これらの死んだ骨に預言するがよい。そのうえに肉ができ、皮

¹⁶ 『エゼキエル書』には、自らの恐ろしい罪のために民が破壊、疫病、旅愁に苦しんでいるにもかかわらず、神の命令によってイスラエルの復活の望みをあたえる箇所がある。「主は私に言われた。『これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、私はおまえたちのなかに霊を吹きこむ。すると、おまえたちは生き返る。私は、おまえたちのうえに筋をおき、肉をつけ、皮膚で覆い、霊を吹きこむ。すると、おまえたちは生き返る。おまえたちは私が主であることを知るようになる。』私は命じられたとおりに預言した。私が預言していると音がした。見よ、カタカタ音を立てて、骨と骨とが近づいた。私が見ていると、見よ、それらの骨のうえに筋と肉が生じ、皮膚がそのうえをすっかり覆った。しかし、そのなかに霊はなかった。主は私に言われた。『霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺された者のうえに吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。』私は命じられたように預言した。すると、霊が彼らのなかに入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。』(『エゼキエル書』37章4-10節)

膚が覆うように、と。そうすれば、四方から霊がおとずれ、死したる者のなかに入り、生き返るだろう。」

ごらんなさい。造物主ご自身が秩序を乱すことなく、もともとあるものを新たにされているのです。まずはじめにアダムの肉体をお造りになり、そのあと魂を吹きこまれたのです。¹⁷ 女性の身体の中なかでも、同じことが起こっているのです。最初に種から身体ができ、5か月のあとに魂ができるのです。洗礼においても、最初は水によって生まれ、そのあと、罪にまみれた腐敗から魂によってふたたび生まれかわるのです。終わりの日においても同じことです。まず神は大地を生み出され、人間を創る塵を集められ、瞬きする間に私たちの身体を造られ、私たちの魂はそれぞれの住まいに入るのです。パウロがおっしゃっているとおり、大天使たちが叫びかわし神のラッパが鳴り響くなかで、主ご自身が天から降り、死者たちがキリストによって復活し、そのあとで、私たち生きる者たちが復活します。

では、死者たちとは何でしょう。神の掟の中になくすべての民族は、洗礼を受けておりません。「無法に罪を犯す者は、無法に死ぬ。」神は生きたる者らをキリスト教徒と名づけたのです。ごらんなさい。すべての人間は、肉体において復活するのです。パウロの言っていることを信じようではありませんか。パウロは主の御言葉に則り、こう述べられています。「そもそものはじまりから、人間が神によって造られたということを信じない者は、洗礼によって生を受けるとことがわからない。このゆえに、そういう者は、すべての人間が肉体の復活のあとに永遠の生のなかに生きるということも信じられない。信じる者たちは名誉と誉れのなかに生きるが、これらの者たちは侮辱と苦患のなかに生きる。」さて、私たちは残りのことを述べましょう。

主人がぶどう園の実りを収穫しようとして、それが盗まれていることに気づき、跛を呼びつけて盲と対峙させ、事の次第を究明しはじめました。跛は盲に言いました。「私は跛なのだから、もしもおまえが私を背負わなかったなら、私はそこに行きつくことができなかつただろう。」すると、主人は裁判官の席につき、2人を裁きは

じめました。「おまえたちは盗みをしたのだから、盲のうえに跛が乗ったのであろう。」跛がしりもちをついたとき、主人はすべての僕たちのまゝで彼らを容赦なく罰し、苦しみ以外の牢獄に閉じこめるように命じました。¹⁸

兄弟たちよ、このたとえ話の勘どころを理解してください。家政の上手な人間というのは、あらゆるものの造物主、父なる神のことです。その善なる息子は、私たちの主、イエス・キリストです。ぶどう園は、大地と世界です。壁は、神の掟と戒めです。神とともにいる僕というのは、天使たちです。跛は、人間の肉体です。盲はその魂であると考えられます。主人が彼らを門のところに置いたということは、神がこの世を人間の権力に委ね、掟と戒めをあたえたことを意味します。人間は神のご命令を破り、そのゆえに死ぬように運命づけられたのです。はじめ人間の魂は神のもとに連れていかれ、身の証を立ててこう言っていました。「罪を犯したのは、わたしではありません。肉体です。」このためにキリストの再臨まで魂は苦しまなくてもすむのですが、それは神のみぞ知る場所に保存されます。神ご自身が以前言われたように、キリストがこの地を新たにし、すべての死にし者たちをよみがえらせるとき、「柩にいるすべての者たちは、神の息子の声を聞き、よみがえり、善をおこなった者たちは生命の復活のなかで、悪をおこなったものは裁きの復活のなかで柩から出る。」そのとき、私たちの魂は肉体に入り、それぞれが自分の行いに応じて報いを受けます。義人たちは永遠の生が、罪人たちは終わらない死の苦しみにあたえられます。罪を犯したことそのもので、苦しむことになります。

私はこの話を、思いつきによってではなく、聖書に拠ってお話したのです。自分の言葉ではなく、たんなるおしゃべりにすぎません。あの方たちは、教会の聖職者であります。私は教師ではないからです。

白僧と修道士たることについての講話¹⁹

罪深い修道士キリルの、洞窟修道院院長ワシーリイ²⁰への、白僧について、修道士について、魂について、悔

¹⁷ キリスト教の教えによれば、生命は、神が示されたモデルにしたがって動くものである。はじめに物質が現われ、そのあとにその物質に結実する。この二つの本質の相互関係の意味はつねに変わらないが、個々のケースに応じて、その意味は新たなものになる。魂と肉体の相反性は、この物語の象徴的部分の基本的な内容であり、このことはその表題が示すとおりである。

¹⁸ キリルが常套的に用いる言葉遊びである。魂にたいして肉体、神の権威にたいして公の権力という対比と同じように、「外の」という対比は、天上世界にたいして「外の」世界ということである。跛は、ぶどう園の外に出されたのである。

¹⁹ Слово о бельцах и монашестве (Подготовка текста, перевод и комментарии Н.В. Понирко) // БЛДР Т. 4. С170-184, 612-614. По рукописи 16 в., РНБ, собр. Титова, №2074(522), л. 304-320; И.П.Еремин. Литературное наследие Кирилла Туровского // ТОДРЛ, т. XII. М.-Л., 1956, С. 348-354.

²⁰ キエフ洞窟修道院の掌院(大修道院長)で、1182年没。ワシーリイはトゥーロフのキリルと常に書簡を交わしており、スヒマ僧についてのキリルの書簡は、このワシーリイに宛てて書かれたものである。年代記が伝えるところによると、ワシーリイは白僧(教区の聖職者で妻帯を許される)の出身で、キエフのシチュカヴィツァ地区の教区教会の主任司祭であったが、剃髪と同時に黒僧(修道士)となり修道院長に推戴された。掌院となったのは、キエフ洞窟修道院の修道士たちの選挙に拠った。

い改めについての物語

ある町に王がおりました。王はたいへん物腰が柔らかく、思いやりがあり、慈悲深く、よく配下の者たちを心遣っておりまして。しかし、敵からの攻撃を恐れず、戦うための武器を持たず、誰かほかの者が自分に立ち向かってくるということを考えないというたった1つの点で、王は賢くはありませんでした。王は、おそばに多くの友人、顧問官、男のような知恵をもつ1人の娘をもっておりまして。そのなかに、ある1人の賢い頭のよい顧問官がおりまして。この顧問官はいつも王が恐れを抱かないことを悲しみ、適当な時を見計らって戦いに備える必要があることを王に説こうと、機会をうかがっておりました。

夜の1の刻に、突然、町中にもものすごい轟音がとどろきわたりました。すると、王は自分の顧問官たちに「外に出て町を巡回しよう。そうすれば、私たちの町に騒乱を起こした者を見つけ出し、捕まえることができるだろう。というのは、私は今ほんとうに恐ろしかったのだ。」彼は出て行ってそこらこらを歩き回りましたが、何も見つけることはできませんでした。ただ町中がパニックに陥っているのを見ただけでした。

すべての顧問官たちは狼狽し、このことにびっくり仰天していましたが、この頭のよい顧問官は、さまざまな武器をたくさんもって、王とその娘を大きな山に連れていきました。すると、そこで洞窟の隙間から明るい光が漏れてくるのを見ました。

この隙間に顔を寄せて覗いてみますと、彼らは洞窟のなかに住居があるのを見えました。そこには、これ以上ないほど貧しい男が、ボロのシャツを着て座っていましたが、そのとなりに、妻がいてどんな食べ物よりも甘い歌声で歌っていました。彼らのまえにある堅い岩のうえに、美しい背の高い男が立っていて、男に食べ物をささげ、葡萄酒を注ぎました。男が杯を取ると、彼らは大いなる喜びという桂冠をこの男に捧げました。

このいきさつをすべて見た王は、自分の友人たちを呼んで彼らにこう言いました。「わが友人たちよ、何という奇跡だろう。極貧の名もない人々が、私たちの王国よりもはるかに中身のある素晴らしい人生を楽しんでいるのを見たであろう。中にあるものが、外にあるものよりも、まぶしく輝いている。」

この言葉で立ち止まり、無学な者の知恵について説く、このたとえ話の意味を明らかにするために、元の話に戻しましょう。知恵の敏い者は、話を聞かなくても、すべてをわかっているでしょう。話の結末を詳しく話すこと

にしましょう。

兄弟たちよ、町というのは、人間の身体そのものです。その身体をお造りになった造物主、創造者がいらっしゃいます。そのなかに暮らす人々というのは、感覚の諸器官のことを言います。聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚、欲望の卑しい熱です。王とは、身体全体を束ねる知の働きです。それは、素晴らしく柔和で慈悲深いものです。知は、自分の身体のことを何よりも熱心に気にかけ、身体が必要とするものを探し求め、それを衣服で着飾させます。王は自分の配下の人々のことをよく面倒を見るのです。善を聞いては高揚し、悪のために惑わされ、目で欲望を掻き立て、嗅覚で望みを叶え、口でものを食べ、手で飽くことなく掴み富を自分のものにし、それとともに卑しい官能の欲望を遂げます。

たった一つのことによって愚かだというのは、何によって愚かなのでしょうか。それは、魂のことを気にかけないことによってです。いまこの場所で悪に生きる者たちの終わることのない苦しみに思いを致さぬことによって、来世において義人たちに用意された生への準備をしない点において、愚かなのです。ソロモンが次のようなことを言っているのに耳を貸さないのです。「いかに幸いなことか。知恵に到達した人、叡智を獲得した人は。」²¹

顧問官と友人たちは、世を生き抜くための考えです。それは、私たちに死について考えるのを妨げるものです。聖書は、死は逃亡であると言っています。というのは、キリストはユダヤ人たちに、「逃げるのが冬や安息日にならないように」²²とおっしゃっているからです。すなわち、あなたが罪のなかにいるうちに、あるいは、安息日に悔い改めもなく、死があなたに追いつかないように、ということですね。

戦のための武器というのは、齋戒であり、祈りであり、節制であり、身体の清らかさですね。「邪悪な日によく抵抗できるように、神の武具を身につけなさい。」²³ですが、世俗にある人々は、これを守りたがらないものです。

夜は、この世の争乱です。この争乱にあっては、闇のなかにいるかのように、周章狼狽し、互いに破滅へと突き落とし合って、悪夢に取り憑かれたかのように、罪を犯さずにいることができないのです。

夜の1の刻に町中に轟音が轟きわたったというのは、病気であつたり、洪水であつたり、疫病であつたり、権力からの迫害であつたり、人間を突然に襲う災厄です。生活のためのあらゆる考えが大手を振るい、知の茫然自失が起こるのです。これが王の恐怖であり、町への巡回であり、騒音を起こした者を捕えることです。いかなる奸計も神のもたらす不幸を変えることはできないのです。

²¹ 『箴言』3章13節。

²² 『マタイによる福音書』24章20節。

²³ 『エフェソの信徒への手紙』6章13節。

それができるのは、聖なる男たちの祈りだけです。これは真実です。ペテロのための教会の祈りは、ペテロを牢獄と鉄枷から救い出しました。²⁴パウロが次のように言うことを私たちは耳にしています。「私たちは耐えられないほどひどく圧迫され、私たちは死の宣告をされた思いでしたが、あなた方の祈りによって神は私たちを救い出してくれました。」²⁵

もしも生きている者たちが神に必要なものを願うことがふさわしくないならば、就寝された聖者たちに呼びかけましょう。このことの証人となっているのはイザヤです。イザヤはエゼキヤが死ぬという神からの言葉を伝えましたが、その後、イザヤはエゼキヤに神から健康が授けられたばかりではなく、町が救われたことをも伝えたのです。「神はそなたの僕ダビデのために、そなたにこれをあたえる。」²⁶同様に、3人の少年たちは祈ってこう言ったのです。「あなたに愛されたアブラハムのために、あなたの僕イサクのために、あなたの聖なるイスラエルのために」と。かくのごとくして、彼らは焼け死なず、炎から出たのです。²⁷

知恵に恵まれた賢い顧問官が見計らった相応しい時というのは、魔法や魔術師たちを探さずに信仰を求めて次のように言ったことをいいます。「私は幸いです。私があなたの教えに耳を傾けるように、あなたは私を低めてくださったからです。」²⁸「神のお気に召すとおりになった。」主は生命をあたえ、生命を奪われます。主は富ませ、貧しくさせます。主は和らげ、たかぶらせません。主は病人たちを病氣から治します。

山は修道院です。そこには、齋戒、祈り、涙、節制、清浄、愛、謙抑、服従、勤勉、覚醒など、悪魔に備える魂の武具がたくさんあります。知恵に恵まれた賢い顧問官が、王をかの山に連れて行ったのですが、それはつまり、知恵の悲しみが王を、修道院、つまり、神の山に、恵み豊かな山、多くの水を湛えた山、神が自らが住むこ

とをお決めになった山に連れてきたということです。山に来るということは、つまり、神への誓いの言葉を述べるということです。「約束しなさい。そうすれば、報いがある。」²⁹さらに、「私はあなたに私の満願の捧げ物を捧げます。私が苦難のなかで唇を開き、この口をもって誓った誓いを。」³⁰

隙間を覗いたことは、魂の役に立つ教えを聞いたことを指します。「御言葉が開かれると光が差し出で、嬰兒にも理解があたえられます。」³¹また、次のように書かれています。「目を上げて、私は山々を仰ぐ。私の助けはどこから来るのか。」³²ここで、ダビデとともに次のように言わなくてはならない。「私の出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。いまもとこしえに。」というのは、キリストは誰のことをも力づくで悔い改めに引きずり出したりしませんから。そのかわり、キリストは、その人が天の王国にいたることができるように、物事を噛んで含めて理解させようとなさるのです。

深い洞窟とは、預言者たちによって預言され、使徒たちによって建てられ、福音書作者たちによって飾られた修道院の教会です。その中から差ししてくる一条の光とは、賞賛の言葉による神への奉仕であり、次のような詩篇の声によるもの言わぬハレルヤです。「夜ごと、主の家にとどまる人々よ、聖所に向かって手を上げ、主を讃えよ。」³³また、「夜半に起きてあなたに感謝を捧げます。」³⁴「あなた方の光を人々のまえに輝かしなさい。人々が、あなた方の立派な行いを見て、あなた方の天の父をあがめるように。」³⁵

洞窟の内部は、修道規則であり、修道士の僧坊の生活にかんする使徒的な誓いです。そのなかでは、誰も自分勝手は許されませんし、すべてはすべての人々にとって共有のものであります。というのは、すべての人々は、体のいろいろな部分がたった一つの頭の支配のもとにあるのと同じように、修道院長の指導のもとにあります。

²⁴ 使徒ペテロが監禁されたとき、「教会はたえまなく彼のために祈った。」すると、主の子羊が牢獄にいるペテロのもとに現われて、見張りの目には見えないうにペテロを連れ出して自由にした。『使徒言行録』12章3-10節。

²⁵ 『コリントの信徒への手紙二』1章8-11節。

²⁶ 預言者イザヤは重い病にかかったエゼキヤのもとを訪れ、王がじきに死ぬであろうという主なる神の言葉を伝えるが、エゼキヤが熱心に祈ったところ、主は預言者に王のもとに戻り、神が彼を治癒したこと、「自らの僕ダビデゆえに」アッシリアの王からエルサレムを救ったことを伝えさせた。『列王記下』20章1-6節。

²⁷ バビロンの3人の少年、アナニイ、アザリイ、ミサイルのことを指す。彼らは、不敬なる王、ネブカドネザルによって建立された黄金の偶像に跪拝しなかったという理由で、ネブカドネザルによって燃え盛る炉のなかに投げ入れられた。彼らは炉のなかで唯一なる神を讃え、「あなたに愛されたアブラハムのために、あなたの僕イサクのために、あなたの聖なるイスラエルのために」救済を祈ったところ、炉のなかに現れた神の天使が、彼らのために炎を涼しくしたので、彼らは無傷のまま炎のなかから出てきた。『ダニイル書』3章1-93節。

²⁸ 『詩篇』119篇12、26、64、68、124、135節。

²⁹ 『詩篇』119篇62節。

³⁰ 『詩篇』66篇13-14章。

³¹ 『詩篇』119篇130節。

³² 『詩篇』121篇1節。

³³ 『詩篇』134篇1-2節。

³⁴ 『詩篇』119篇62節。

³⁵ 『マタイによる福音書』5章16節。

その中に住んでいる極貧のなかに暮らす男は、すべての修道士身分の人々です。座っているとは、沈黙の業のことです。「私は言いました。『私の道を守ろう、舌で過ちを犯さぬように。私は自らを抑え、私の口に轡をはめ、あらゆる幸福から遠ざかろう。』」また、「私の耳は聞こえないかのように開こうとしません。口は話せないかのように、開こうとしません。」これと似たほかのいろいろなことが言われています。極貧のなかで暮らしていたというのは、白僧たちからの非難であり、憤りであり、非難であり、中傷であり、嘲笑であり、好奇の目です。というのは、彼らは修道士たちを神に仕える人々と見ていないからです。修道士は偽善者であり魂を滅ぼす者であると考えているのです。「神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。私たちは世界中に、見せ物となったからです。」³⁶「私たちはキリストのために愚か者となっているが、あなた方はキリストを信じて賢いものとなっています。」³⁷

ひどい身なりをしているというのは、比喩でも何でもありません。ここでは、目の粗い布地、苦行衣、ラシヤ地の衣服、山羊の毛皮の祭服が着られているからです。なぜなら、あらゆる高価な祭服、肉体の飾りは、修道院長たちとあらゆる修道士身分の者たちにとって無縁のものだからです。「しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。」³⁸ですが、修道士たちは叡智という衣服を身に着け、真実という帯を締め、謙抑という飾りをつけているのです。

この男と一緒に座っている女というのは、人はいつか死ぬと、いつなんどきでも覚え続けていることです。それは次のような甘い歌を歌うのです。「喜び歌う声が天幕に響く。」³⁹「正しい人々は永遠にそこに住み、主から報いを受ける。」⁴⁰「正しい者にとって死は救いである。」⁴¹「富が過ぎ去っても、それに心を砕いてはいけない。」⁴²「私はすべての無法をおこなう者たちを憐れみはしない。」⁴³「私は呻き、パンを食べることさえ忘れた。」⁴⁴

その男のまえに立つ美しい若者は、キリストです。「主は主を恐れる人々とともに立ち、彼らの望みをかなえ、祈りを聞いてくださいます。」「あなたは人の子の誰より

も美しい。」⁴⁵「主は憐れみ深く恵みに富む。」⁴⁶「私は人々に仕えさせるために来たのではない。私自身が仕えるために、自らの魂を多くの人々の救済のために用いるために来たのだ。」⁴⁷非常に背が高いというのは、天から降りて、救済のために人の体に受肉し、人間を神化するために、人間となった神の息子だからです。

キリストは、私たちの信仰という堅い岩のうえに立っています。このことをアモスとエレミヤが証言しています。彼は言っています。「見よ、この背の高い人が堅い岩のうえに立ち、地の端々に呼びかけ、自らの人々に食べ物をおもてしている。」エレミヤは言いました。「あの方は人間だ。その方のことをだれが知ろう。その方が神であることを、地の隅々にいたるまで知らしめるがよい。」

食物を給仕し、ぶどう酒を注ぐのは、信仰のあるすべての者たちが罪を離れるために自らの妙なる身体をおもてしめ、自らの聖なる血を永遠の生にあたえるということです。警告をおもてする友人たちは、各人の良心です。パウロは叫んでいます。「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の身体と血にたいして罪を犯すことになります。」

男が盃を取り、彼が賞賛という桂冠を授けられるとき、この時こそ、悔い改めによって身が清められる時、魂が聖化され肉体が浄化されて生を創る杯を受けとる時だということを理解するがよい。このとき、父なる神はダビデの預言者の声でこう讃えている。「いかに幸いなことでしょう。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。主に咎を数えられない人は。」⁴⁸また、「主によって喜び躍れ。心の正しい人よ、喜びの声をあげよ。」⁴⁹聖霊が桂冠を授けるのです。なぜなら、聖霊は桂冠を捧げられた者のうえでやすらっているからです。聖霊は彼らを自分にふさわしい器とし、そのなかに居を定めたのです。なぜなら、彼らは涙で聖霊の聖堂を洗い、熱心な祈りでその床に敷物を延べ、善行で飾り、犠牲という香の煙を燻らせたからです。キリストは聖なる天使たちとともに大いなる喜びをもって喜び躍っているからです。「悔い改める一人の罪人について大きな喜びが天にある。」⁵⁰「無くした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでくだ

³⁶ 『コリントの信徒への手紙一』4章9節。

³⁷ 『コリントの信徒への手紙一』4章10節。

³⁸ 『マタイによる福音書』11章8節。

³⁹ 『詩篇』118篇15節。

⁴⁰ 『詩篇』37篇29節。

⁴¹ 『エゼキエル書』24章14節。

⁴² 『詩篇』102篇5-6節。

⁴³ 『詩篇』45篇3節。

⁴⁴ 『詩篇』103章8節。

⁴⁵ 『マタイによる福音書』20章28節;10章45節。

⁴⁶ 『詩篇』32篇1-2節。

⁴⁷ 『詩篇』32篇11節。

⁴⁸ 『ルカによる福音書』15章7節。

さい。』⁴⁹

こういうことをすべて見て、王は自分の友人たちを呼び集めました。見るということは、罪深い習慣から離れ、祝福された者に学ぶというめでたい決心をすることであり、この世の空虚な生活の思いつきを一まとめにして、この誘惑に満ちた世のすべての幸を非難することです。ソロモンはこう言っています。「何というむなしさ。すべてはむなし。』⁵⁰

あらゆる人間は、自らに労働を課すことで自らを破滅から救い、神によって見守られた天使のような生活に歓喜し、すべてのものを離れ、自らの肉の悲しみをとも離れ、肉体の誘惑を経て魂のことを真剣に考えるようになるものです。

このようにすべてを説明し終えましたが、ほかのこともきちんと考えておきたいと思います。なぜなら、この話を創ったのは私たちではなく、この話は神の息吹に満ちた書物から、まるで引き出しから取り出してきたかのように、借用してきたもので、私たちは、あなた方の父の愛のまゝで子供のように沈黙を守りながら、編み細工を編んで、あなた方を喜ばせていたのです。

これは修道士たちへの讃辞です。キリストの恩寵の認識について、洞窟への入場、すなわち、剃髪について、預言者の諸書にのっとってお話ししましょう。

王は言いました。「極貧の名もない人々が、私たちの王国よりもはるかに中身のある素晴らしい人生を楽しんでいることか。中にあるものが、外にあるものよりも、まぶしく輝いている。」これは、賢い人が魂のことを思い出したのです。「王は兵の数によって救われない」⁵¹からです。そして、あらゆる権力は罪と関わっています。また、商人たちが取引するときにも罪は行われますし、ほかのあらゆる生活上の事柄についても同様です。貧困にあっても富貴にあっても、家族と家が救済の妨げになります。このことについて、使徒が言っています。「結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと心を遣い、結婚していない男は、どうやったら神のお気に召すかに心を遣います。』⁵²前者の心配は人を苦しみに導き、後者の心配は人を永遠の生に導きます。

極貧の名もない人々の生活とは、修道士の生き方にほかなりません。各々が謙抑と服従に向かって歩み、神のことのみに喜びを覚え、自分の労働によって神と人々か

ら尊敬を受けるのです。樹木というものは、その高さや葉の茂り方ではなく、実る果実によって讃められるものです。修道院が修道士たちに名誉をもたらすものではありません。修道士としての善行が修道士に名誉をもたらすのです。

これはキエフ洞窟修道院の修道院長、フェオドーシイにおいて見て取ることができます。フェオドーシイはうわべを取り繕うことなく修道生活を送り、神を熱愛し、自らの兄弟たちを自分の身体の一部のように愛していましたが、そのことで神も彼とこの場所を愛し、フェオドーシイゆえにキエフ洞窟修道院はルーシでもっとも誉れ高い修道院になりました。聖なる修道士たちの生活の内なる善行は、その奇跡によって、世俗の権力よりも輝いています。このゆえに、世俗の貴顕たちは修道士たちに自らのこうべを垂れ、次のような類の言葉にしたがって、神のお気に入りの方たちにそれにふさわしい敬意を表するのです。

「正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。』⁵³ほかのところでもまた、「あなた方を受け容れる人は、私を受け容れる。』⁵⁴もう一つ付け加えて、「小さな群れよ、恐れるな。あなた方の父は喜んで神の国をくださる。』⁵⁵「私の名のために、父、母、もっているすべてのものを捨てた者は100倍もの報いを受け、生命を受け継ぐ。』⁵⁶

この約束のために、あらゆるキリスト教徒は自らに主の重みを担う、つまり、自らに修道士の位を引き受けなくてはならないのです。

それでは、最後にかの王の入場についてお話ししましょう。王は自らの一人娘を連れて洞窟の中に入っていました。娘というのは、知の魂を指すものとご理解ください。というのは、魂は知から生まれ、天使の位階と共通のものをもっているからです。「さまざまな風を伝令とし、燃える火を御もとに仕えさせられる。』⁵⁷

なぜなら、霊はあらゆる善行にたいして旺盛な活力をもち、神のお気に召す功業への行進において素早いものですが、肉体は無力だからです。天使の務めと修道士の務めは全く同じものです。というのは、両者ともに自らの意志を捨て、神と修道院長の命令にしたがうものだからです。そうした労働にたいしては、神ご自身が褒賞をくださいます。こう言われています。「私の言葉によっ

⁴⁹ 『ルカによる福音書』15章9節。

⁵⁰ 『コヘレトの言葉』1章1-2節。

⁵¹ 『詩篇』33篇16節。

⁵² 『コリントの信徒への手紙一』7章32-33節。

⁵³ 『マタイによる福音書』10章41節。

⁵⁴ 『マタイによる福音書』10章40節。

⁵⁵ 『ルカによる福音書』12章32節。

⁵⁶ 『マタイによる福音書』19章29節。

⁵⁷ 『詩篇』104篇4節。

て自らの魂を滅ぼそうとする者は、それを永遠の生の中に見出す。』⁵⁸

知自身が中に立つ者にこう言うのです。「私に真実の門を開けよ。その門に入り、主にこう告白するがよい。『主に求める人には良いものの欠けることがない。』⁵⁹」

まえに立つ者が答えます。「これは主の門である。正しい者がこの門に入る。主はここに善意のなかに暮らす人々の善を奪うことはないであろう。それを行おうとするそなたはいったい何者か。」

それは答えます。「私は王の娘です。『彼女は王のもとに導かれていく。おとめらを従えて。』⁶⁰」

立っている者は答えます。「聞くがよい。娘よ。見るがよい。耳を傾けるがよい。自らの民とそなたの父の家のことを忘れよ。あなたは修道女であるにもかかわらず、『王はあなたの美しさを慕う。』⁶¹」

ということは、つまり、人間は身体の欲望と生活の気遣いを捨てることがないかぎり、その魂は神と和解することができないということです。なぜなら、神とマモン両方に仕えることはできないからです。黒さとは、つまり罪なのです。「私は黒いけれども美しい。」⁶²かつて犯した罪と生活の気遣いのために、そなたは黒いのです。美しかったのは、すぐに悔い改めたからです。黒いのは、この世のしがらみを押しつけてくる権力によって黒いのです。美しいのは、修道士の剃髪によって美しいのです。

「王妃は栄光に輝き、進み入る。」⁶³

「そなたは誰なのです。」

「私は羊の牧者である。私はあなた方99頭の羊を放っておいて、迷った1頭の羊を探しに降りてきたのです。⁶⁴もしも私の言うことを聞くのなら、『民の豪族は、あなたが顔を向けるのを待っている。』⁶⁵」

すると、こう答えます。「私はあなたに誓いました。私はあなたの言葉の群れの羊だからです。よき羊飼いや、私はあなたのもとにはせ参じます。迷える私を受け容れ、その唇で私に接吻してください。」

私が秩序正しい言葉の使い手であることをよく理解してください。私が聖書以外から何かを引いてきているとは思えないでください。もしも私たちが、私たちが剃髪したときの誓いを守っているのなら、私たちは罪の赦し

だけではなく、ツァーリや公たちから額づき跪拝されている、あなたたちの多くの聖なる教父たちや奇跡成就者たちのように、地上の名誉をも受けることができるでしょう。そればかりではなく、天上の王国で神の御顔を見ることができるでしょう。すなわち、祈りのなかでお願いしたことの倍のものを、即座に受けとることができるでしょう。

立っている者にさらに質問すると、こう答えます。「もしもあなたが牧者ならば、『私を見捨てないでください。遠く離れないでください。』⁶⁶ 悲しみの時が近づいています。というのは、私はあなたについてイザヤがこうおっしゃっているのを聞いているからです。『この方は羊飼いとて群れを養い、御腕をもって集め、子羊を懷に抱き子宮にはらむ母たちを慰める。』⁶⁷」

新たに叙聖された修道士たちにあつては、言葉にならないにしても、考えがこういうもののなのです。修道士としての誓いを立てたものの、自らの弱さを克服できぬ者は、聖性をあたえてくださるよう祈るしかありません。聖書を読み、神に功業がなくても救ってくださるよう祈るのです。というのは、パウロが「功業なしに誰も桂冠を授けられない」⁶⁸と言っていますが、私たちは理解できないからです。しかし、眠ったままで勝利に達することはできませんし、怠けたままで自らを救うことはできません。

神はその賜物において後悔をなさいません。このことを天上ではっきりと証ししてくださるのは、私たちの主、イエス・キリストです。イエス・キリストは特別な理由がなくても修道士を救ってくださいます。「世のためではなく、私にあたえてくださった人々のためにお願いします。あなたの御名において、彼らをお守りください。私が行くところに彼らも私とともにいられるように。彼らのだれもが死なないように、私だけが死ぬようになります。」⁶⁹

このような誓いを立てたのですから、修道士たちよ、功業に励みなさい。

いまの使徒たちのなかには、ユダがいるということになっていますが、各々が自らを守りますように。私たちが神のロゴスを偽りに売りわたしませんように。盗みを

⁵⁸ 『ルカによる福音書』17章33節。

⁵⁹ 『詩篇』34章11節。

⁶⁰ 『詩篇』45篇15節。

⁶¹ 『詩篇』45篇12節。

⁶² 『雅歌』1篇5節。

⁶³ 『詩篇』45篇14節。

⁶⁴ 『マタイによる福音書』18章12節; 『ルカによる福音書』15章4節。

⁶⁵ 『詩篇』45篇13節。

⁶⁶ 『詩篇』38篇22節。

⁶⁷ 『イザヤ書』40章11節。

⁶⁸ 『テモテへの手紙二』2章5節。

⁶⁹ 『ヨハネによる福音書』17章9,10,12,24節。

働きませんように。略奪をしませんように。侮辱をあたえませんように。修道院長に邪悪な思いを抱きませんように。誓いを立てて自分を正しいと言い張りませんように。ふさわしくないのに聖なる秘蹟に与ることによって、私たちがキリストを十字架に架けることがありませんように。自らを神の僕とすることで、多くの忍耐をもって自分の救済を確かなものにするができますように。

群れにいる馬がたがいに競い合い、力比べをするように、あなた方は聖なる教父たちの功業に励み、斎戒、徹夜祷、祈り、神への務めの労働においてたがいに競い合って、大食、酩酊、肉体の欲求のために力を弱らせることなく、地獄の荒野をさまようことなく、そこでゲヘナの獣たちに食い荒らされることがありませんように。炎に苦しめられた私たちの身体が、地面のように、焼けただれることがありませんように。私たちの骨が黄泉の口に散らされることがありませんように。⁷⁰

理性という自分の羽を生やし、私たちを滅ぼす罪から離れて高く飛び立ちましょう。聖なる書物から食物を摂取し、ダビデとともに言いましょう。「あなたの仰せを味わえば、私の口に蜜よりも甘いことでしょう。」

こうしたことをお話して、私は自らを大きく見せたいではありません。自分が楽しめればよいと思うだけです。手際よくお話することはできませんでした。私は罪深い人間であり、私の舌は私のいやらしい身体の一部だからです。私が神の書物の深みに降りることができたとしても、私は知恵のつたない舌で素朴な声を出せただけです。師父たちよ、世の神が自らの大いなる慈悲をもって、この物語があなたの国で理解されるようにしてくださいことを祈ります。神が、あなたの魂を清らかに、身体が汚されずに、生活は曇りなく、処女は犯されず、修道士たちは堕落せず、信仰が誘惑に会うことなく、つねに魂のことを思い、兄弟同士の愛がうわべだけのものではなく、あなた方の平安が徴によって飾られ、天の扉が開け放たれ、炎の武器がどけられ、高きイスラエルに導かれ、自らの右手で桂冠を授けられ、食卓に呼ばれ、喜びと楽しみの杯があたえられますように。

あなた方をお願いいたします。私を犬っころのように蔑ろにしないでください。この場所では、聖者たちの祈りにおいて私を覚え、かの場所では、聖なる食卓からごくわずかな食べ物のかけらを投げてください。神がすべてのキリスト教徒を、そのかけらをいただくのにふさわしいものにしてくださいますように。私たちの主、イエ

ス・キリストにより立つ生活ができますように。イエス・キリストに父と聖霊とともに、今も永遠に世々にわたり栄光がありますことを。

スヒマ僧についての修道院長ワシーリイへの書簡⁷¹

ある長老修道士の、神に祝福された掌院ワシーリイへのスヒマ僧についての書簡

ふつつかでそれに値しない私から、神にも似たるそなたへ跪拝いたします。私の親しいご主人様、神に祝福された正しさこのうえないワシーリイ様、真に栄えある全世界で偉大なる掌院様、全世界で偉大なる父たちの父よ、高き道の導き手よ、知によって神の霊のこもった書物に精通した、繊細なる理性をもった魂よ、洞窟修道院の2代掌院フェオドーシイとは名前こそ違うものの、その行いと信仰によって、フェオドーシイの聖性に等しい方よ。いや、キリストは自らのお気に入りの僕として、自らの母へ仕える者として、あの方以上にあなた様を高きに置かれたのです。なぜなら、あの方は教会を建築される途中で神に召され、神のもとに旅立たれましたが、神はそなたを通して教会を建立されたばかりか、聖なる大修道院の周りに石の城壁を拵えられたからです。⁷²この城壁の内側には、聖者たちの住まいがあり、神に似たる者たちの屋敷があつて、たえまなく三位一体において讃えられる神を讃え、聖霊によって二つの位格に受肉し、処女マリアによって人間となられ、私たちの罪のゆえに磔と死の苦しみを受けられた方を讃えているのです。

ご主人様、そなたはこのことについて私に文書を送りくださいましたが、そこでそなたは、長らく以前よりそなたがお望みになっていた、偉大なる聖なるスヒマ位についてご下問なさりました。そなたは無知なる者が訊ねるがごとくにはお訊ねにはならず、教師が生徒を試すように、主人が僕を試すように、知恵貧しき私にお訊ねになりました。私は聖なるスヒマ位についてそなたに自分の考えを述べるものではありません。聖なる書物に書かれていることを述べるのです。というよりも、むしろ、キリストご自身の話から、石の上に自らの聖堂を建て、石の上に家畜小屋を建てた、あの人間についての喩え話⁷³を思い出していただくと思うのです。

砂のことを考えるのはおやめなさい。家を建てるということも、川のことも、雨のことも、建物に吹きつける

⁷⁰ 『詩篇』141篇7節。

⁷¹ Послание к игумену Василию о схиме (Подготовка текста, перевод и комментарии Н.В. Понырков) // БЛДР. Т. 4. С. 198-205, 616. По рукописи 16 в., ГИМ, Синодальское собр., №935, л. 11-14 об.

⁷² キエフ洞窟修道院の神の御母就寝の石造りの教会の起工は、フェオドーシイの生涯の最後の年、1073年に行われ、聖堂はその死後に竣工した。このことは、『フェオドーシイ伝』、『過ぎし歳月の物語』、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』に書かれている。

⁷³ 『マタイによる福音書』7章24-25節；『ルカによる福音書』6章47-48節。

激しい風のこともさておき、わがご主人のワシーリイ様、あなたがそうありたいと思っていられる聖なるスヒマ位についてお聞きになるがよいでしょう。

そなたは洞窟修道院の周りすべてに固い基礎のうえに、高く美しい石の壁を築されましたが、はじめに自らの富を見出し、それから、火で煉瓦をこしらえ、最後に水と漆喰で煉瓦を固められました。この聖なる建造物は、しかしながら、聖霊が住まうために自らの身体の中に造られる神の神殿にはおよばないのです。

そのような聖なる修道院を造りたいとお望みならば、聖なる三位一体に基礎を置かなくてはならない、すなわち、聖なるスヒマ位によって新しくならなければならない、つまり、「自分で財産を計算する」ことが必要です。どういうことかという、まずは神に祈りを捧げ、腰を下ろし、気持ちを集中させて、死ぬる時まで守りつづける自らの誓いを書き留めるのです。週に1日、あるいは、月に1日、あるいは、2日、食べ物や飲み物を断ちたいとか、祈禱のなかで夜を明かしたいとか、人々と話をせぬ無言の業を行いたいとか、誓いを立てた日には修道院から外に出ないとか、自分の手仕事でできたものを喜捨に回したいとか、人から頼まれたことを実行に移したいとか、怒りに赦しをあたえろとか、そういうことです。そなたがまずはじめに実行すれば、神はそなたに自らの分を返すでしょう。

もしもそなたがスヒマ位によって偉大に見える人々をみて、じっくり考えることなくアナロフ⁷⁴とクコリ⁷⁵を身に着けたいと思うならば、どんなに齋戒と祈禱に励んでいたとしても、確かな基礎をもっていないから、雨でもなく、風でもなく、自らの愚かな思いによって家は倒れてしまうでしょう。万事きちんと節制を守ることあれば、「祝日だから」とか、「友人のてまえ食べたり飲んだりしよう」とか、「キリスト教徒に呼ばれたのだから、あとでまた齋戒をはじめればよい」とか、弱い生きかたをすることもある場合は、一方では家を建て、その一方では家を壊すようなもので、死者の穢れを払い落した後で、ふたたび死者に触れるのと同じです。多くの人々は、齋戒と節制によって身体を消耗させるのですが、彼らの口から悪い匂いが出て、そのためによく考えることもなく悪いふるまいをおこなってしまい、それで神から離れてしまうのです。ロトはソドムでは無法者たちとともに誘惑に陥ることはありませんでしたが、ツォアルでは娘たちと汚らしいふるまいをしました。⁷⁶

そなたは白僧の時代も、修道士になってからも、神の

お気に入りでした。魂の潤う生活をされておられました。ですが、よき修道士という重荷を授かってからは、あの使徒のように、すべての後ろのものを忘れ、まえのものに全身を捧げなさい。⁷⁷そなたの誓いの規則に則って、地上の悲しみを下らぬものと思い、天上の生活のことをつねに思いなさい。ロトのように酩酊のなかで悲しみを鎮めようとはせず、細心の配慮をもってキリストの生を真似なさい。なぜなら、主はご自身が使徒たちに誓われたことを、おあたえになったからです。そなたはすべての兄弟たちに誓われましたので、その誓いを実行しなくてはなりません。そなたは彼らとともに神をとものにいただき、彼らとともに愛をいただき、ともに報いをいただき、ともに桂冠をいただき、多くの身体に一つの同じ魂を宿し、みなのために褒賞を受けるのです。

見てください。私が畝と畝のあいだに落ちた種子です。種子とは、神への労働についての言葉です。もしもドクムギがあるなら、悪い種子を根こそぎ引き抜き、私を罰してください。もしもそれが小麦ならば、それは道端でもなく、石のうえでもなく、茨でもないところに蒔かれたのです。⁷⁸しかし、3つが死んでしまったのなら、1粒から100粒を得ることができるとを期待しています。スヒマ位を受けることについて彼らと相談するならば、神のお助けを得ることができるでしょう。

聖者たちの生き方をすべてそなたはご存知です。聖者たちは誓いを立てて功業に励み、桂冠を得ました。何ものも彼らの家を壊すことはできませんでした。尊敬も、称号も、名誉も、悲しみも、窮乏も、迫害も、怠惰も、すべてのものは彼らの家を壊すことはできなかったのです。悪魔も、自身は壊したくて仕方なかったのですが、聖者たちの行いを誓いから逸脱させることはできませんでした。それはあたかも、銅の斧が乾いた木によって折れてしまうのとおなじで、悪魔は邪悪なことをしても、信仰心の豊かでたしかな者たちは、誘惑をとおして桂冠を獲得してしまうからです。弱い者は悪魔によって墜落するわけではありません。自らの悪い思いによって落ちるのです。動きやすい砂のように、悪い思いによってよい芽を摘んでしまうのです。

そなたが霊の神殿を建てようと望んでいるのなら、信仰を土台とし、希望と愛を煉瓦として建立しなさい。あなたの魂が聖堂のように聳えあがるように、水で泥を捏ねるように、純潔でああなたの身体を清めなさい。円柱で支えるように、神の助けを聖堂の支えとしなさい。雨だとか洪水だとか、さまざまな災厄が襲ってきたとしても、

⁷⁴ イエス・キリストの受難のさいに使われた攻め具を描いた四角形の布で、修道士の胸や肩を覆った。

⁷⁵ 修道士の帽子。

⁷⁶ 『創世記』19章。

⁷⁷ 『フィリピの信徒への手紙』3章13節。

⁷⁸ 『マタイによる福音書』13章46,7節。

善良な人間にとっても邪悪な人間にとっても巖のように聖堂が聳えあがりますように。聖堂のなかに、母と妻を、すなわち、穏やかさと謙抑を導き入れなさい。穏やかさは神のお気に召しますし、謙抑は天にまで人を導きます。神への畏れと祈りによって、盗賊を防ぐ壁を四方に巡らせ、賢い知を番人に立てなさい。そなたが町にしようと、人々のなかにしようと、村にしようと、市場にしようと、あなたの心がさまざまな思いによってかき乱されないようにしなさい。どんな場所にしようと、僧房のなかにいるかのように、魂が肉体に巻きこまれぬように考えをめぐらせながら、砂漠に去った者のようにわが身を気遣いなさい。

こういったことすべてを神の助けとともにに行い、他人を非難するなどして傲慢のなかで尊大になることがないならば、自由な目で思いのなかの光を見出し、ヨブが次のように言っているように父の光を見るでしょう。「あなたのことを、耳にはしておりました。しかしま、この目であなたを仰ぎます。」⁷⁹ 肉体のことではなく、霊のことを言っています。「主よ、私たちは御顔の光のなかを歩きます。たえず御名によって喜び躍ります。」⁸⁰ 私のご主人様、神は誓いを破らぬようにそなたの心を強めてくださいます。「主に誓いを立て、それを果たせ。」⁸¹ また、ふたたび、「願をかけておきながら誓いを果たさないなら、願をかけないほうがよい。」⁸² 同様に、使徒たちは私たちに批判してこう言っています。「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。」⁸³

私の親しいご主人様、私の恩人よ、私のことを怒らないでください。私を憎まないでください。私は口からではなく、私の無分別からこういうことを書いてしまったので、引き裂いて地に投げ捨ててください。私の言葉はクモの巣のようにひとりで地に落ちます。聖霊の恵みがなければ、役に立つことはないでしょうから。教師のように、つまり、父のように整然と、私はあなたを教え導いたわけではありません。そなたの愛が私の口を開か

せたという理由のみによって、私はきわめて率直にそなたとお話をしただけです。私の親しいご主人様、敬虔なるワシーリイよ、書かれたもののなかからそなたは気に入ったもの、そなたにとってよいものを選び取るのがよいでしょう。そなたには思慮分別がありますから、すべてのことをよく弁えておられます。

罪深い私は主に、あなたが健康でいること、平安に長寿であること、聖なる神の御母の家⁸⁴をお建てになること、ふさわしく神にお仕えになることを祈ります。そなたがいつもあらゆる聖者たちとともに、父祖と父たちとともに、使徒たちと総主教たちと神に似たる修道院長たちとともに、聖なる神の御母と聖なるフェオドーシイの祈りによって褒賞を受けられますように。そなたは、私たちの主、イエス・キリストに拠ってフェオドーシイの息子であり継承者なのですから。

柳の日曜日についての講話⁸⁵

花咲く日曜日に。⁸⁶ 聖キリルの福音書についての物語。

宝物庫は偉大で太古からあり、啓示は驚くほかになく喜ばしく、富は素晴らしくかつ力強く、贈り物は近き者たちに惜しみなくあたえられ、家を建てる腕のよい匠たちは素晴らしく尊敬に値する人たちで、王の食卓の残り物は豊かで尽きることがなく、乞食たちを養って余りあります、あの腐ることのない食べ物、永遠の生にある食物は。というのは、福音書の言葉、キリストが人々の救済のために何度となく口にした言葉は、私たちの魂にとっては食べ物だからです。

その名誉と誉れに満ちた家、教会は、腕のよい匠たちを持っています。それは、総主教や主教たちであり、聖職者たちや修道院長たちであり、あらゆる教会の教父たちです。彼らは信仰と清らかさにおいて神に近づくものであり、聖霊の恵みによって、キリストにあたえられた賜物に応じて、教えという贈り物、治癒という贈り物

⁷⁹ 『ヨブ記』42章5節。

⁸⁰ 『詩篇』89篇16-17節。

⁸¹ 『詩篇』76章12節。

⁸² 『コヘレトの言葉』5章4節。

⁸³ 『ヘブライ人への手紙』12章4節。

⁸⁴ トゥーロフのキリルは、キエフ洞窟修道院を、修道院の主聖堂が神の御母の就寝に捧げられたことにちなんで、神の御母の家と呼んでいる。

⁸⁵ Слово на вербное воскресение (Подготовка текста, перевод и комментарии Н.В. Понирко) // БЛДР. Т.4. С. 184-190, 614-615. По рукописи 14 в., ГИМ, Чудовское собр. №20, л.178-181; Литературное наследие Кирилла Туровского // ТОДРЛ, т. XIII. М.-Л., 1957, С. 409-411.

⁸⁶ 花咲く日曜日 Цветная неделя, Цветоносная неделя は、受難週まえの大斎期の最期の日曜日で、12大祭の一つ。主がエルサレムに入場したことを記念する。復活したラザロが姉妹たちと住んでいたベタニアから、弟子たちとともにエルサレムに到着したキリストを、ユダヤの子どもたちが花咲く棕櫚の枝を手にもって迎えたことから、この祝日の名前が生まれた。『マタイによる福音書』21章1-11節; 『マルコによる福音書』11章1-11節; 『ルカによる福音書』19章28-38節; 『ヨハネによる福音書』12章12-19節。ルーシでは、古くからこの日に聖堂に棕櫚の枝のかわりに柳の枝を持ち寄り、聖堂を聖別する習わしがあった。このゆえに、「柳の日曜日」とも言われる。柳の日曜日の前日が、ラザロの土曜日で、死後4日たったラザロがキリストによって復活したことを記念する。

を受け取っています。このようなわけで、私たち貧しい者は、この食卓の残り物をいただき、満腹になるのです。なぜなら、あらゆる奴隷は主人を誉めるものだからです。

兄弟たちよ、到来した祝日のゆえに、私たちには今日喜びがあり、この世には楽しみがあります。この祝日にキリストによってなされた徴により、預言者の書に書かれたことが実現しました。この日、キリストは子ロバに乗ってベタニアからエルサレムに入りましたが、それはゼカリヤの預言が実現するためでした。ゼカリヤはあの方についてこう述べています。「娘シオンよ、大いに喜べ。いまそなたの王が高ぶることなく、子ロバに乗って来る。」⁸⁷ この預言をよくよく心に留め、喜び祝いましょう。

高きエルサレムの娘たちというのは、聖者たちの魂です。若い子ロバというのは、あの方を信じる異教徒の人々です。あの方は、悪魔の惑わしから彼らを救い出すために、使徒たちを遣わされたのです。

この日、さまざまな民族に人々が手に棕櫚をもってイエスを出迎えにきました。棕櫚を手にもつことで、イエスに尊敬の気持ちを表したのです。「ラザロを墓から呼び出して死者のなかからよみがえらせた」⁸⁸ からです。人々の服従は素晴らしいものです。その服従によって、諸国の民はあの方が神の息子であるとわかったからです。あの方はユダヤ人のあいだで奇跡を起こし、諸国の民には救済と恩寵をあたえました。ユダヤ人たちはあの方が神の子であるとはわかりませんでした。諸国の民はあの方を受け入れました。イスラエルは、自らを永遠の生へと導くあの方を拒み、あの方を信じた諸国の民は天の王国に入ることができました。彼らには没落と誘惑がありましたが、諸国の民には信仰と勃興とがありました。

この日、使徒たちは子ロバのうえに衣服をかけると、キリストはそのうえにまたがりました。⁸⁹ おお、妙なる秘密の現われよ。というのは、キリスト教徒の善行とは、使徒たちの福だからです。使徒たちは、自らの教えによって、敬虔な人々を神の玉座に、聖霊の住まいにしたからです。「私は彼らのあいだに住む。そして、彼らの神となり、我らは私の民となる。」⁹⁰

この日、諸国の民は自らの衣服を敷いて道となし、また、別の者たちは木から枝を切り取り、その枝を敷いて道としました。⁹¹ キリストは、世界を統治する者たち、貴顕たちにとって善き正しき者になりました。彼らは喜

捨と謙遜によって道をつくり、難なく天の王国に入ることができるのです。木から枝を折ったのは、ふつうの人々で罪人たちですが、彼らは心を碎き、魂を揺り動かすこと、齋戒と祈りによって、自らの道を平らにし、神へといたることができるのです。「私こそ、道であり、真理であり、命である。」⁹²

まえを行く人々も、後ろを行く人々も、口々に「ダビデの子にホサナ。主によって来られる方に、祝福があるように。」⁹³ 前を行く者とは、預言者と使徒たちです。預言者たちはキリストの到来について預言しましたし、使徒たちは世界全体にたいして神が来られたことを告知らせ、その名において諸国の民に洗礼をほどこしました。後ろを行く者たちは聖職者たちと殉教者たちです。聖職者たちはキリストの御ために異端者と激しく戦い、彼らを悪魔として教会から退けました。殉教者たちはキリストの名において血を流して苦しみ、すべてを放りだしてキリストのあとを歩み、その苦しみを分かち合う者となりました。すべての者たちがホサナと叫び、こう言いました。「あなたこそ、神の言いつけに背いたために墮落したアダムを立ち上がらせるために、地上で肉となった神の息子です。祝福を受けるために、私たちは主の名において善行を積むことに努めます。」

この日、全エルサレムが主の到着のために動きだしました。イエスを神として礼拝するために、老人たちがすばやく行進しました。ラザロの復活という奇跡を讃えるために、子供たちがすばしこく走ってきました。幼児たちが、キリストの周りを翼で舞うがごとくに回り、叫んでいます。「ダビデの子にホサナ。主の名において来られる方に、祝福があるように。神は主であり、私たちに自らを現わされました。」おお、秘密の現われよ。預言の解決よ。老人たちというのは、異教徒を指します。なぜなら、以前にはアブラハムとイスラエルが民だったのです。そのとき、彼らは誑かしを受けて神から遠ざかりましたが、いま、信仰をもって神の息子に跪拝しています。子供のイメージは、聖なる、童貞たるを愛する教父たちです。なぜなら、彼らは常にキリストを愛し、神の恩寵によって奇跡をおこなっているからです。幼児たちのなかには、キリスト教徒たちの原イメージがあります。キリスト教徒はキリストについてあれこれさかしらに考えたりせず、キリストのために生き、キリストのために死に、キリストに誓い、キリストに祈ります。

⁸⁷ 『ゼカリヤ書』9章9節; 『マタイによる福音書』21章5節; 『ヨハネによる福音書』12章15節。

⁸⁸ 『ヨハネによる福音書』12章17節; 11章1-46節。

⁸⁹ 『マタイによる福音書』21章7節; 『マルコによる福音書』11章7節; 『ルカによる福音書』19章35節。

⁹⁰ 『コリントの信徒への手紙二』6章16節。

⁹¹ 『マタイによる福音書』12章8節; 『マルコによる福音書』11章8節; 『ルカによる福音書』19章36節。

⁹² 『ヨハネによる福音書』14章6節。

⁹³ 『マタイによる福音書』21章9節。

この日、アンナスとカイアファ⁹⁴は内心面白くありません。すべての人々に喜びと楽しみがあるのに、この2人には悲しみと狼狽があります。祭司階級は賢くあらねばならず、預言者の書を博搜して、これがキリストであるかどうかを確かめなくてはなりません。キリストについては、ヤコブが息子たちに「ユダよ、おまえの子孫のあいだから天と地の主が現われ、諸国の民の安らぎとなるが、その方は子ロバをぶどうの木につなぐ」⁹⁵と言いました。この2人は、この方についてダビデが次のように預言して言っていることを思い出しませんでした。「幼子、乳飲み子の口によって、あなたは讃えられた。」⁹⁶彼らはゼファニヤがこう書いているのを理解しませんでした。「エルサレムよ、喜び踊れ。そなたの神への道を準備せよ。なぜなら、その方は奇跡をおこない、徴をあたえながら、自らの教会に来るからだ。」⁹⁷彼らはその代わり、あらゆる福をあたえる方に陰謀を企て、イエスだけではなくラザロも殺そうとして、民びととともにこう言おうとはしませんでした。「主よ、そなたは偉大なり。そなたの声は地獄の深みを揺るがし、彼らの中から死んだラザロを引きずり出して、死んだラザロは救われてふたたび生へ戻っていった。」

この日、すべての生き物は、悪魔の奴隷の使役から解放されて喜びます。地獄の門と枷は震え、悪魔たちは恐怖しました。

この日、丘々と山々は喜びをほとばしらせ、畑と野は神に実りを捧げ、天の者たちは歌い、地獄の者たちは哭き、天使たちは、天上において見えざる方が、見ることができる者として地上を歩き、ケルビムの玉座におられるあの方が子ロバにまたがっておられるのを、天上の軍勢を寄せつけないあの方が諸国の民に囲まれているのを見て、驚いているのです。いまや幼児たちが、セラフィムたちも天上で畏れとともに讃える方を、喜びに満ちて讃えています。いま、指尺で天を測り、手のひらで地を測る方がエルサレムに向かう道を行進していきます。いま、天に居をもつことを退けられたあの方が、教会のなかに入っていけます。

この日、祭司長が偉大なる奇跡をおこなわれるあの方に憤りをぶつけます。学者やファリサイ人たちが、枝をもってキリストを迎え「ダビデの子にホサナ」と叫ぶ子供たちを羨みます。なんとという素晴らしいことでしょう。どうして彼らは預言者たちのことを忘れてしまったので

しょう。それぞれが異教徒たちを救済する私たちのキリストについて書いているのに。「もはやイスラエルの息子たちのあいだにも私を求める気持ちはない。私は私を求めようとしぬ者にも現われ、私のものではない者たちにも『そなたたちは私の民』と言う。」⁹⁸

であるから、兄弟たちよ、私たちは神の民なのだから、私たちを熱烈に愛するキリストを讃えなくてはならないのです。来なさい。キリストに跪拝しましょう。心のなかでキリストの清らかな足に接吻していたあの娼婦⁹⁹のように、ひれ伏しましょう。彼女のように、邪悪なことから離れましょう。彼女が香油をキリストの頭に注いだように、キリストに私たちの信仰と愛を注ぎましょう。諸国の民のように愛をもって外に飛び出し、キリストを迎えましょう。彼らが枝を折ったように、憤りに流されやすい自分の気持ちをへし折りましょう。乞食たちに喜捨をあたえてまえを歩きましょう。謙抑と覚醒と齋戒であることを歩きましょう。40日間の齋戒の重き勤めを台無しにしないように気をつけましょう。この齋戒のなかで、いまキリストが私たちのエルサレムに入場されるように、私たちはあらゆる汚れから身を清め、精進に励んだのです。なぜなら、私たちの身体のすべての部分は、イザヤが次のように述べているように、エルサレムと呼ばれるからです。「エルサレムよ、私は自らの手のうえにそなたの城壁を描いた。私はそなたのなかに住む。」¹⁰⁰

部屋を片づけるように、私たちの魂の謙抑さで準備しましょう。神の子がワインとパンとともに私たちのなかに入り、自らの弟子たちとともに復活祭を祝うことができますように。自らの意志で苦しみを受けるために来た者とともに、私たちも出かけましょう。あらゆる侮辱を耐え忍んで自らの十字架を背負いましょう。罪に抗うことによって自らを磔にしましょう。肉体の欲望を殺して叫びましょう。「天にある方にホサナ。自らのご意志で苦しみに歩まれた方に祝福があるように。その苦しみによって、そなたは地獄を踏みにじり、死に打ち勝たれた。」

ここで説教は終わりにしましょう。花で桂冠を授けるように、歌で聖なる教会に桂冠を授けましょう。祝日を飾りましょう。神に賞賛を捧げましょう。聖霊の恩寵に包まれながら、キリスト、私たちの救い主を讃えましょう。喜びのうちに祝日を記念し、平安のうちに私たちの主、イエス・キリストの3日後の復活に到達することができますように。キリストに、あらゆる名誉と誉れ、君

⁹⁴ ユダヤの大祭司。ゲッセマネの園でとらえられたイエスは、彼らのところに連行された。『ヨハネによる福音書』18章13-24節。

⁹⁵ 『創世記』49章10-11節。

⁹⁶ 『詩篇』8篇3節; 『マタイによる福音書』21章16節。

⁹⁷ 『ゼファニヤ書』3章14-15節。

⁹⁸ 『イザヤ書』65章1節。

⁹⁹ 『マタイによる福音書』26章7節; 『ルカによる福音書』7章37-38節。

¹⁰⁰ 『イザヤ書』49章16節。

臨と跪拝に相応しい方、父と、聖なる福なる命の源なる聖霊とともに、常にいまとこしなえに世々に、あらゆる名誉と誉れ、君臨と跪拝があらんことを。

復活祭のあとの新しい日曜日の講話、¹⁰¹ 復活が新たになることについて、アルトスについて、¹⁰² トマスが主の脇腹を確かめたことについて¹⁰³

祝日を飾るためには、偉大なる教師と賢明なる物語の語り手が必要です。私たちは言葉において乞食のようであり、知は濁っていて、魂のためになる言葉を綴ろうとしてもそれに必要な聖霊の炎をもっておりません。ですが、私とともにいる兄弟たちの愛のために、キリストの復活が新しくなったことについてお話ししたいと思います。

聖なる復活祭があったこの前の日曜日、天には驚きがあり、地獄には恐怖がありました。すべての被造物は新しくなり、世界は救済され、地獄は壊れ、死は蹂躪され、死者たちには復活があり、悪魔の偽りに満ちた権力は毀たれ、キリストの復活によって人類に救済がありました。律法が貧しくなり、土曜日¹⁰⁴が奴隷となり、キリストの教会が栄え、日曜日が王の位につきました。この前の日曜日に、すべてが変わりました。というのは、悪霊たちの穢れから神によって清められて、地が天となったからです。天使たちが女性たちとともに奴隷のように復活に仕えたからです。¹⁰⁵

被造物は新しくなりました。というのは、太陽も、炎も、泉も、木も、自然物は、もはや神だとは呼ばれないからです。というのは、このときから地獄はもはや、父

たちの刃で殺された幼児たちを捧げ物として受け入れることはないし、死が敬われることもないからです。偶像崇拜が終わり、十字架の秘跡によって悪霊の暴力は破滅したのです。人類は救われたばかりではなく、キリストへの信仰によって神聖なるものになったのです。古い律法は完全に落ちぶれました。羊や山羊の血を神殿に捧げることが廃されたからです。キリストご自身、お一人だけが自らによって神への供犠となったのです。このことで土曜日を祝日とすることは終わり、キリストの復活ゆえに日曜日に恩寵があたえられたのです。1週間の日々のなかで、日曜日だけが君臨しているのです。というのも、まさにこの日にキリストが死者たちのなかから復活したからです。

日々の王に桂冠を授けましょう。キリストへの信仰をもって、心のこもった捧げ物を捧げましょう。それぞれの人間が持てる力に応じてそれを行いましょ。ある者たちは喜捨と温和さと愛を、ほかの者たちは清らかな処女性と真実の信仰とうわべのものではない真実の謙抑を、ほかの者たちは詩篇の朗唱と、使徒の教えと、神の御前で深いため息をともなった祈りを。というのは、主ご自身がモーセの口をとおしてこう言われているからです。祝日に「何も持たずに私のまえに現われてはならない。」¹⁰⁶だから、神から憐れみをいただくために、神に先ほど述べた善行を捧げましょう。なぜなら、神は信仰をもって来る者からは善を奪わないからです。神は、「私を讃える者たちを私は讃える」と仰せです。

新しい日曜日を美しく祝いましょう。この日に、復活が新たになることを祝いましょう。この日は主の復活祭

¹⁰¹ 別名は、アンティパスハ Антипасха。アンティパスハのギリシア語の原義は「パスハ（復活祭）の代わり」。復活祭の次の日曜日を指す。「フォマ（使徒トマス）の日曜日」、「クラスナヤ・ゴルカ Красная горка」とも呼ばれる。前者は、『ヨハネ福音書』20章24-29節に由来する名称で、後者は、アンティパスハと習合した、丘で太陽神ダジボグにたき火を焚く、異教的な民衆祭儀に由来する名称。

ナジアンゾスのグレゴリオスは、その説教『新しい日曜日に』において、アンティパスハについて次のような考えを表明している。最初の創造（世界創造）と同じように、キリストの復活によって新しくなった新しい世界は、日曜日に始まった。復活祭から数えて8日目のこの日は、更新の日として祝われる。それは、「埋葬と復活のあいだにある」救済の日そのものである復活祭とは異なり、「復活の思い出」の日であり、「まったく新しい誕生」の日である。この祝いの内容であり神への捧げものとなるべきものは、「内的な更新」である。内的な更新は、春に自然が新しくなることと関連づけて捉えられる。Пономарев А.В. «Антипасха» // Православная энциклопедия.

¹⁰² 復活祭に教会で聖別される円筒形のパンで、ふつう、上面に復活のキリストの図像が、側面に復活祭の赦しのトロパリの全文が刻されている。アルトスは、使徒たちの食卓で、復活したが人間の目には見えないキリストのために用意されたパンに由来するとされる。この点が、キリストの肉体を象徴する聖パンとは本質的に異なっている。

復活祭の日に聖別され、「明るい週 светлая неделя（復活祭後の1週間）」のあいだ、アナロイ（ロシア正教の経机）のうえに置かれ、明るい週の土曜日まで毎日、聖堂の周りの十字架行進のさいに持ち出され、ふたたびもとの場所に戻される。明るい週の土曜日に、司祭によってちぎり分けられ、信徒たちに配られる。配られたアルトスは、必ずしもその日に食べる必要はなく、保存されて空腹時や病気のときに食される。12世紀の文献『エフホロギヤ Эвхология』には、アルトスがちぎり分けられるのはアンティパスハのときであると規定されており、トゥーロフのキリルもこの慣習に従っていたと考えられる。Желтов М.С., Рубан Ю.И. «Артос» // Православная энциклопедия.

¹⁰³ Калайдович К. Памятники российской словесности XII века, изданные с объяснением, вариантами и образцами почерков. М., 1821. С.18-28; Творения святого отца нашего Кирилла, епископа Туровского с предварительным очерком истории Турова и туровской иепархии до XIII века. К., 1880. С.14-22.

¹⁰⁴ サバト、ユダヤ教の安息日。

¹⁰⁵ 『マタイによる福音書』28章；『マルコによる福音書』16章；『ルカによる福音書』24章。

¹⁰⁶ 『出エジプト記』34章20節。

(パスハ)ではなく、復活祭の代わりになるもの、アンティパスハと名づけましょう。というのは、復活祭は世界が悪魔の暴力から救われ、死者たちが奥底果てなき地獄から解放されたことを記念するのですが、アンティパスハは復活が新たにされたことを記念するからです。それは古い律法のイメージをもっているのです。それは神がエジプトにおいてモーセにあたえられたものでした。神はこう言われました。「私は私の人々をファラオの労働から救い出す。監督者たちの責め苦から自由にする。私がそなたの敵に打ち勝ったとき、そなたの救済の日を新たにできるように。おお、イスラエルよ。」¹⁰⁷

見てください、いま私たちは、全世界に救済をあたえ、闇の権力と原理に打ち勝ったキリストの勝利の日の祝日を新たに祝いなおすのです。このゆえに、アルトスは復活祭の日からこの日まで教会で聖なるものとして取って置かれ、この日、司祭たちによって運ばれてちぎり分けられます。それは酵母の入っていないパンと同じことです。このパンは、紅海にたどり着くまで、レビ人たちの頭のうえで砂漠を運ばれました。¹⁰⁸このパンは神に捧げられていたものですから、それを食べた者は健康になり、悪魔から見れば恐ろしい者になりました。身体が奴隷の身であることから解放されると、イスラエルの民たちはこの事件を新たなものにして、酵母なしのパンの日を祝いました。

そして、私たちは、ファラオにも比すべき悪魔への奴隷状態から主によって救い出されて、悪魔にたいする勝利の日を新たにします。そしていま、この聖別されたパンを手に取りながら、それを食します。それはまさしく、ユダヤ人たちが天のパン、天使の食物を食べたのと同じことです。私たちはこのパンをあらゆる善が、身体と魂に健康が、救済が、あらゆる病気を追い出すことが必要となる時まで、取って置きましょう。

この日、古い契約は終わりを迎え、見えるもの、見えないもの、すべてが新しくなりました。いま空は輝きわたり、古いボロ着を脱ぎ捨てるかのように、暗い雲を払いのけています。明るい空気のなかで主の栄光を讃えましょう。私がほんとうに言いたいのは、この見える天のことではありません。理性の天のことです。つまり、この日、使徒たちは、シオンで彼らのまえに現われた方が主であることがわかり、ユダヤのあらゆる悲しみ、嘆きを忘れて、恐怖を振り捨て、聖霊によって守られて、キリストが復活したことをはっきりと告白したのです。

いま、太陽は美しさに輝きながら天の高みに昇り、喜びに満ちて大地を暖めています。というのは、枢のなか

から正義の太陽キリストが私たちのために立ち上がり、キリストを信じるすべての人々を救済しています。いま、月が高みから降りて、もっと大きな天体に尊敬を顯わしています。聖書にしたがって、古い律法は土曜日とともに終わり、預言者たちはキリストの新しい法にたいして、日曜日にたいしてと同様に尊敬を顯わしています。いま、罪深き冬は悔い改めとともに終わってしまいました。不信仰の氷は、神をわかる心によって解けました。異教の偶像崇拜の冬は、使徒たちの教えとキリストへの信仰によって終わってしまいました。トマスの不信仰という氷は、キリストがわき腹を見せることで解けました。¹⁰⁹

この日、春はその美しさに輝きわたり、大地の本性を活気づけています。酷烈な嵐は柔らかな風となってやさしく吹き、果実を実らせませす。大地は種を育み、緑色の草を茂らせませす。美しい春とは、キリストへの信仰です。それは、洗礼によって人間の本性をふたたび生まれ変わらせたのです。嵐の風とは、罪深い考えの数々です。それは、悔い改めによって善行へと変わり、魂にとって有益な実りをゆたかに実らせませす。私たちの本性という大地は、種を受け入れるように、神の言葉を受け入れ、つねかわらず神への畏怖を抱きつづけつつ、救済の霊を生み出すのです。

いま、新たに生まれた子羊や子牛たちが道に駆けだし、飛び跳ねていきますが、じきに母親のところに帰ってきては喜んでいます。牧者たちが葦笛を吹きながら、喜びをもってキリストを讃えます。子羊とはおだやかな異教徒たちであり、子牛は不信心な国々の偶像崇拝者たちです。彼らは、キリストが人間になったこと、使徒たちが教え諭したこと、数々の奇跡によって、はじめしばらくは律法にしたがっていましたが、聖なる教会に戻って来て、教えという乳を飲んでいのです。キリストの群れの教師たちは、すべての者たちのことを祈っており、狼も子羊も同じ1つの群れに集めた神キリストを讃えているのです。

いま、木々は新芽を吹きだし、かぐわしい匂いの花々が花開き、そして、ごらんなさい、果樹園は甘い香りを放っています。農夫たちは希望をもって労働に勤しみ、果実をもたらししてくれるキリストを呼び招いています。私たちは、以前は実をつけない櫟の木のようなでしたが、いまはキリストの信仰が私たちの不信仰に接ぎ木されました。すでにエッサイ¹¹⁰の根は力強く張って、善行を花々のようにつけ、キリストに拠っての、あの世での楽園の生活を待ち望んでいるのです。

いま、言葉の耕し手は、言葉の子牛たちに霊のくびき

¹⁰⁷ 『出エジプト記』12章。

¹⁰⁸ 『出エジプト記』13章3-8節;16章。

¹⁰⁹ 『ヨハネによる福音書』20章24-29節。

¹¹⁰ ダビデの父。

をつないで、思いの犁き道に十字架の犁を深く沈め、畝と畝のあいだを通る悔い改めという犁き道を耕し、霊の種子をまき、来世の福という希望で喜び踊っています。

この日、古いものは終わりを迎えました。ごらんない。復活によって、すべては新しくなりました。いま、使徒たちの川は水があふれだし、民という言葉の魚が満ちあふれ、漁師たちは、神が人間になったということの深さを測りながら、教会という網にいっぱいかった魚を水揚げします。預言者は言っています。大地は川であふれかえるが、不信心な者たちは見ても、どうしてよいかわからず困り果てている、と。

いま、修道士の姿をした勤勉なミツバチが自らの賢さを示し、みなを驚かせます。修道士たちは、砂漠で自給自足の生活をして天使たちや人間たちを驚かせていましたが、この者たちは花に向けて飛び立ち、蜜を集め、人間たちと教会の必要のために、甘い楽しみをもって来ます。

いま、それぞれが教会の一員である、歌声の美しいあらゆる鳥が、一つの場所に巣を造り、喜び歌っています。というのは、預言者は言っているのですが、鳥は自分の巣を見つけましたが、それはまさにそなたの祭壇なのであり、それぞれが自分の歌を歌い、沈黙することない歌声で神を讃えているからです。つまり、主教たち、修道院長たち、司祭たち、輔祭たち、堂務者たちがおのれの歌を歌い、主を讃えているのです。

この日、聖なる者たちのあらゆる階層が、キリストに拠って新しい生を得ました。預言者たちや父祖たちは、いろいろな困難を経験したあとで、楽園の生のなかで休息をとっています。使徒たちは聖職者たちとともに苦しみを受けたあとで、天と地で讃えられています。殉教者たちと信仰告白者たちは、キリストのために受難を被ったのち、天使たちとともに桂冠を授けられています。敬虔なる王たちや公たちは服従によって救済されます。童貞の男たち、修道士たちは忍耐強く十字架を運び、初子であるキリストのあとを追って地から天へと歩みます。斎戒者たちや荒野での生活者たちは、主の御手から労働の褒賞を受けとって、高きにある町で聖者たちとともに喜び祝っています。

この日は、新しい人々にとって、キリストの復活を新しくする日です。あらゆる新しいものが神に向って運ばれていきます。異教徒たちから信仰が、キリスト教徒たちから神への勤めが、司祭たちからは神聖な捧げ物が、世俗の支配者たちからは神を愛する喜捨が、貴顕たちからは教会の保護が、正しい者たちからは謙虚な叡智が、罪人たちからは真実の悔い改めが、不信心な者たちから

は神へ向き合うことが、たがいに敵意を抱き合う者たちからは霊の愛が。

兄弟たちよ、心に思いを抱きながら、シオンの山に登っていきましょう。そこに使徒たちは集まったのです。そこに、家にはしっかりと鍵がかかっていたにもかかわらず、イエス・キリストご自身が彼らの真ん中に立ってこう仰せられたのです。「あなた方に平和があるように。」喜びが彼らを満たしました。主を見て弟子たちは大いに喜び、あらゆる身体の悲しみ、心の恐怖を振り払ったと言われています。自らの主を知ることによって、霊の勇氣が彼らの魂を貫きました。なぜなら、主はみなのもえで自らの脇腹を見せて、手と足の釘による傷をトマスに触らせたからです。

トマスは主が最初に来られたときそのほかの弟子たちとは違って主に会うことができませんでした。主がよみがえられたと聞いてもそれが嘘であると思い、信じませんでした。そればかりか、キリストをこの目で見たいと思い、こう言いました。「もしも私の手をそのわき腹にあて、自分の指で釘の傷に触らなければ、信じない」と。このために主は彼を責めることなく、こうおっしゃいました。¹¹¹

「自分の手をこちらにもってきて、私の脇腹の刺し傷を見て、私が私自身であることを信じるがよい。おまえのまえにいる父祖たちや預言者たちは、私のことを理解して、私が人間になったことを信じた。私についてのイザヤの預言を調べてみるがよい。『槍でわき腹が突かれた。血と水が流れ出た。』¹¹²私がわき腹を刺し貫かれたのは、わき腹によって倒れたアダムを復活させるためだ。私は、私を信じないそなたを見捨てるであろうか。

私に触るがいい。私は私自身なのだから。私は、かつてシメオンが抱きとり、信仰をもって安らかに去らせてくださるようになり出た、その私である。¹¹³あのヘロデのように不信仰であってはならない。ヘロデは私が生まれたことを聞きつけ、占星術の学者たちにこう言った。『キリストはどこで生まれたのか。私も行ってその方に跪拝しよう。』だが、心のなかでは、私を殺そうと考えていたのだ。幼子たちを殺したが、探していた者は見つからなかった。¹¹⁴なぜなら、悪人たちは私を探し出そうとするが、見つけることはできないのだから。

トマスよ、私を信じなさい。私は、アブラハムが木陰にいたとき2人の天使とともにやってきた、その私である。アブラハムは私に気づいて、私を主と呼び、ソドムのための執り成しをおこなった。その町には、10人くらいは義人たちがいるのだから、その町を私が滅ぼさな

¹¹¹ 『ヨハネによる福音書』20章19-29節。

¹¹² 『ヨハネによる福音書』19章34節。

¹¹³ 『ルカによる福音書』2章25-35節。

¹¹⁴ 『マタイによる福音書』2章8節。

いように頼んだのだ。¹¹⁵ バラムのように不信仰であってはならない。バラムは聖霊によって私が平和のために殺され、復活することを預言した¹¹⁶が、ふたたび褒美に目がくらんで破滅した。¹¹⁷

トマスよ、私を信じなさい。ヤコブが、夜に私が階(きざはし)に腰を下ろしていたところを見た、その私自身である。ヤコブは、私が彼と川と川のあいだで闘ったとき、霊によって私が私だとわかった。そのとき、私はその末裔の誰かに人間となって受肉すると約束した。¹¹⁸ ネブカドネザルのように不信仰であってはならない。炉のなかに抛りこまれた若者たちを救った私を見て、¹¹⁹ 私を真実に神の子であると呼んだが、そのあとでふたたび自らの欺瞞に引きこまれて破滅した。

トマスよ、私は、イザヤがその姿をたくさんの天使たちのなかの玉座にいるのを見た、まさにその私である。¹²⁰ 私は生きもののなかで人間の姿をしてエゼキエルに現われた、まさにその私である。生き物の傍らに寄り添い、私とともに動く車輪の姿で、私はエゼキエルにおまえたちの原イメージを示した。そのとき、車輪のなかにいた生きた霊は、私がそなたたちのなかに吹きこんだ聖霊である。¹²¹ 私は、ダニエルが天の雲のなかに見た、『人の子』に似ている、『日の老いたる者』まで降りた、まさにその私である。¹²²

双子よ、¹²³ そなたの指をこちらにもって来て、私の両手を見なさい。この両の手で私は盲の目を開け、聾の耳を聞こえるようにし、唾を自由に言葉がしゃべれるようにしたのである。私の両足を見なさい。この足で、私はおまえたちのまえて海のうえを歩き、はっきりとした姿で宙を歩み、地獄にこの両足を踏み入れ、そのことで地獄を破壊し、この両足でクレオパとルカとともにエマオまで歩いたのだ。¹²⁴ 信仰のない者になってはいけません。信仰のある者になりなさい。」

トマスは答えました。「主よ、私は、そなたが私の神であることを信じます。そなたのことは、霊に導かれて預言者たちが書いています。そなたのことは、モーセが律法のなかで原イメージを示しています。そなたのこ

は、祭司たちとファリサイ人たちが退けました。そなたのことは、ユダヤ人が律法学者たちとともに羨望ゆえに罵りました。そなたのことは、ピラトがカイアファとともに磔の刑に処す判決を出しました。そなたのことは、父なる神が死者たちのなかから復活させました。

私は、そなたがそこから血と水を流した、まさにそのわき腹を見えています。水は汚れた大地を清め、血は人間の本性を聖化します。私は、かつてすべての被造物をお造りになり、樂園を定め人間をお造りになり、父祖たちを祝福し、王たちに塗油し、使徒たちを聖別されたそなたの両手を見ます。私は、そなたの両足を見ます。その足に触れて、娼婦は罪の許しを得ました。その足もとに身を投げて、寡婦は、死んだ息子を魂とともに生き返らせていただきました。その足もとで、出血の止まらない女は服の裾に触れ、病氣から治りました。¹²⁵ 主よ、私は、そなたが神であることを信じます。」

すると、イエスは言いました。「そなたは私を見たから信じた。見ないで信じる者は幸いである。」¹²⁶

このようなわけです。兄弟たちよ。私たちの神キリストを信仰しましょう。磔にされた方に跪拝しましょう。復活された方を讃えましょう。使徒たちに現われた方を信じましょう。トマスに自らのわき腹を見せた方を誉め歌いましょう。私たちを生き返らせるために到来された方を讃えましょう。私たちに光をもたらされた方への信仰を告白しましょう。私たちにあふれるばかりの福を授けてくださる方をますます偉大な方と心に刻みましょう。三位一体のなかで唯一の主なる神、私たちの救世主、イエス・キリストを覚えましょう。イエス・キリストに父と聖霊とともに、いまでも永遠に栄えありますことを。

キリストの身体の十字架降下についての講話¹²⁷

キリストの身体の十字架からの降下、携香女たちについての、福音書の物語からとられたキリルの講話、復活祭後の3週目の日曜日のヨセフへの讃辞

¹¹⁵ 『創世記』18章。

¹¹⁶ 『民数記』24章17節。

¹¹⁷ 『民数記』25章;31章8節。

¹¹⁸ 『創世記』32章23-32節。

¹¹⁹ 『ダニエル書』3章。

¹²⁰ 『イザヤ書』6章1節。

¹²¹ 『エゼキエル書』1章。

¹²² 『ダニエル書』7章13節。

¹²³ トマスはアラム語で「双子」の意。

¹²⁴ 『ルカによる福音書』24章13-35節。

¹²⁵ 『マルコによる福音書』5章21-34節。

¹²⁶ 『ヨハネによる福音書』20章29節。

¹²⁷ Слово о снятии тела Христа с креста (Подготовка текста, перевод и комментарии В.В. Колесова) // БЛДР. Т.14. С.158-170, 612-614. По изданию: И.П.Еремин. Литературное наследие Кирилла Туровского // ТОДРЛ, т. XIII. М.-Л., 1957, с. 419-426.

祝日が過ぎ、聖なる教会に神の恩寵をもたらしながら、さらに素晴らしい祝日がやって来ようとしています。¹²⁸ 真珠を連ね宝石を飾った金の鎖を見れば、それを見る目は喜ぶものですが、聖なる祝日を迎えた魂の美しさは、信仰する者たちの心を喜ばせ、魂を照らし出すのです。まずはじめにキリストの復活によって世界が浄化され、復活祭がやって来て、信仰をもつすべての人々を照らし出しました。そして、トマスが主の脇腹を触って確かめたことによって、すべての被造物は新たになったのです。¹²⁹ トマスが手でキリストの傷を触ることで、みんなに肉体の復活が明らかになったのです。

さあ今こそ、携香女たちとともに、敬虔なるヨセフを讃えましょう。ヨセフは、磔のあと、イエスの遺骸に仕えました。福音書は、ヨセフが金持ちでアリマタヤの出身であると呼んでいます。¹³⁰ というのは、ヨセフはキリストの弟子で、神の御国の到来を待っていたと言われていたからです。救世主ご自身が望んだ苦しみのときに、ヨセフは被造物に恐ろしい奇跡が起こったことを見ました。太陽が暗くなり、大地が震えたのです。ヨセフは恐怖に満たされ、驚愕しながらエルサレムに到着しました。そして、キリストの身体が裸で打ちのめされたまま十字架にかけられているのを見ました。

母マリアとたった一人の弟子がキリストのまえに立っていました。マリアは心の苦しみのために激しく泣き、このように言いました。「私の息子よ、そなたが処刑されるという不正義を見て、世界が私のために悔んでいます。わが子よ、光である万物の創造主である者よ、ああ何ということでしょう。私はどのようにして、そなたのために泣けばよいのでしょうか。自分の顔を打つことでしょうか。頬を打つことでしょうか。肩を打つことでしょうか。鎖に縛られて牢獄に閉じこめられることでしょうか。そなたの聖なる顔に唾を吐きかけることでしょうか。そんなことをすれば、無法なる者たちが喜ぶ

だけでしょう。息子よ、なんということでしょう。罪もないそなたがそしりを受け、十字架のうでで死の苦しみを味わうなんて。茨の冠をかけられ、酢を混ぜた苦い汁を飲まされ、清らかな肋骨に槍を突き立てられるなんて。

天は怯え、地は震え、ユダの厚かましさに耐え切れず、太陽は暗くなり、巖は崩れ落ち、ユダヤ人たちは命のない石になります。愛しい子よ、私はそなたが十字架にかけられるのを見えています。裸で、息も絶え、言葉もなく、威厳もなく、美しさもなく、そなたが十字架にかけられるのを見えています。私はつらく、魂を打ちひしがれています。私はそなたとともに死にたかった。息絶えたそなたを見ることは耐えられないのです。喜びが私に訪れることはないでしょう。息子にして神よ、そなたは私の光であり、希望であり、命だったのに、木に架けられて息絶えました。ガヴリイルはかつて「敬虔なる者よ、喜びなさい、主があなたとともにいます」と言いました。そなたはツァーリであり、至高の息子であり、世界の救世主であり、あらゆる生き物を造った者であり、罪への勝利者と言われていますが、だとしても、私にどのような祝福があるというのでしょうか。いま私はそなたが2人の強盗のあいだで磔にされ、そのわき腹に槍を突き立てられるのを見えています。私はこのゆえにひどく苦しんでいます。私は生きたくありません。地獄でそなたに会いたいです。今や私は希望、喜び、楽しみ、息子、神を失いました。何ということでしょう。私は奇しきそなたの誕生のときも、今ほど苦しみはしませんでした。主よ、私はお腹を痛めて子供を産んだのに、いまその子の身体が釘で木に打ちつけられるのを目の当たりにしています。イエスよ、そなたの出生は素晴らしいものでしたが、いまそなたの殺され方は恐ろしい。そなたは一人、種なくして生を受けました。私の処女性の封印を破ることがありませんでした。そなたは私を母として受肉しましたが、私は処女のままでした。私は、アダムのためにそなたが

¹²⁸ キリルの第4講話は、復活祭に関連する諸祝日にかんする、一連の厳かな式典の朗読の範疇に入るものである。復活祭をはじめとするもろもろの祝日は、東スラヴ人にとっては、異教の春の祭りとなっていた。この講話の冒頭部分では、柳の週、復活祭、明るい7日 *светлая седмица* のために書かれた別の講話のなかで述べられた諸事件が数え上げられている。

¹²⁹ 『ヨハネによる福音書』によれば、週の初めの日（日曜日）、イエスは復活し弟子たちのまえに現れたが、12人の弟子のひとりであるトマスはその場に居合わせなかったため、復活を信じず、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をわき腹に入れてみなければ、私はけっして信じない」と言った。その8日後の日曜日、復活したイエスが、「あなたの指をここにあてて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われたので、トマスははじめて種の復活を信じた（『ヨハネによる福音書』20章19-29節）。「新しい日曜日の講話」参照。

¹³⁰ この講話の叙事詩的な基盤は以下のとおりである。アリマタヤのヨセフは、エルサレムの最高法院の議員であったが、キリストの秘かな信奉者であった。アリマタヤのヨセフはピラトに処刑されたキリストの遺骸を引き取りたいと申し出て許可を得た。秘かにキリストを信奉していたニコディムとともに、師の遺骸を岩場に穿たれた自らの家族の墓所に葬った。墓所は、刑が執行された場所からほど遠くない、ヨセフのもっていた地所にあったが、刑場から近かったことから、埋葬は警備の者たちが見ているなかで、過ぎ越しの祭りが来るまえにおこなわれた。過ぎ越しの祭りの最中は、死体に触ってはいけないという禁忌があった。女たちが死者を敬うために香をもってきた女性たち、何人かのキリストの弟子たちが、キリストが復活したあと、2人の天使たちと、起こった事件の意義を解釈する美しい青年を見た。聖母の詩的な哭き歌、ヨセフがピラトを責める論難の言葉、墓を前にしたヨセフの祈り、キリストの墓での若者の物語、ヨセフへの讃め歌、これらすべてはキリルの創作である。ピラトのまえでの論難、キリルの讃め歌には、テキストの内容にしたがってキリルによっていくぶん改変されたり、短縮されたりした、聖書や福音書の引用があふれている。

苦しまれたことを知っていますが、私は魂の苦しみに囚われ、そなたの機密の深さに驚いています。

天よ、海よ、地よ、聞くがよい。私が涙を流し、号泣するのを聞くがよい。というのは、おまえたちの造物主が、祭司たちから苦しみを受け、自らは正しいにもかかわらず、罪人たちや無法なる者たちのために殺されたからです。シメオンよ、今日こそ『あなた自身も槍で心を刺し貫かれます』というそなたの預言が、私において成就しました。¹³¹ イエスよ、そなたが兵士たちに罵られているからです。

いっしょに泣いてくださいと、私は誰を呼べばよいのでしょうか。誰とともに、私は洪水のように涙を流せばよいのでしょうか。というのも、みながそなたを見捨ててしまったから。親類も、友人たちも、そなたの親しい者たちは、奇跡が起こるとそれを喜ぶだけだったのです。いまやあの70人の弟子たちはどこに行ったのでしょうか。最高の使徒たちはどこに行ってしまったのでしょうか。そなたをだましてファリサイ人たちに売った者¹³²もいれば、恐怖のために祭司たちにそなたを知らないと言った者¹³³もいました。おおわが神よ、私一人だけが号泣しながら、そなたの言葉を守る者とともに、そなたの愛する功業者とともにそなたのまえに立ちます。¹³⁴

ああなんとということでしょう。私のイエスよ、大切な御名よ。この世界のはじめに水のなかに立てられた大地は、自らのうででそなたが、神々しく指指しただけでたくさんの盲が目が見えるようにしたそなたが、たった一言で死者をよみがえらせたそなたが、十字架に架けられているのを感じて、どうやって立っていることができるのでしょうか。神の秘められた御心の神秘をここに来て見るがよい。呪われた死を死んだご自身がいかによみがえられるかを。」

こういうことすべてを聞いたヨセフは、激しく泣くマリアに近づきました。この人のことを見ると、マリアはこの人に懇願してこう言いました。「敬虔なる方よ、急いで無法なる裁判官、ピラトのもとに行って、自らの師、私の息子にして神の身体を十字架から下ろすように頼ん

でください。キリストの教えを知る者よ、秘かなる使徒よ、神の王国を待ち受ける者よ、どうぞ頑張って私の望みをかなえてください。木に釘で打ちつけられわき腹を槍で貫かれてすでにこと切れた身体を下すように懇願してください。敬虔なる者よ、キリストの復活のあとにそなたが受け取る二重の桂冠のために、世界の隅々からそなたが受ける名誉と跪拝と天上での終わりのなき生のために、どうか苦しみを共にしてください。」

ヨセフは涙の懇願に心を動かされたので、次のようなことは言いませんでした。「祭司たちは私にたいして事を荒立てて私を目の敵にしましょう。ユダヤ人たちは私を目の敵にして私を打ちすえるでしょう。ファリサイ人たちは私の富を略奪するでしょう。私は社会から孤立無援になるでしょう。」ヨセフはこのようなことを何も言わず、すべてを顧みず、自分の命さえ惜しいとは思わず、キリストのために身を投げ出しました。勇気を出してピラトのまえに進み出て懇願してこう言ったのです。

「代官様、2人の強盗のあいだに磔にされた、羨望のために祭司たちによって讒言され、兵士たちにいわれない罵りを受けた、かのイエスの遺骸を私に引きわたしてください。識者たちが神の息子と呼びファリサイ人たちが王と宣告した、かのイエスの遺骸を私に引きわたしてください。そなたはその頭上に、『これは神の子、イスラエルの王なり』という板を掲げるように命じました。」

自分自身の弟子が騙して祭司たちに売ったその方の遺骸を私に引きわたしてください。その方については、ゼカリヤが『もし、おまえたちの目によしとするなら、私に賃金を支払え。そうでなければ、支払わなくてもよい』と書いて予見していたのです。¹³⁵ゼカリヤはもっとも大切なイスラエルの子の値打ちを銀貨30枚と決めていたのです。カイアファがこの方が全世界のために一人死ぬと預言していた、¹³⁶その方の遺骸を私に引きわたすようお願いいたします。この預言は、これだけを言うものではなかったのです。なぜなら、エレミヤが『牧者たちが私のぶどう園を荒らす』と預言した¹³⁷ように、カイ

¹³¹ 敬虔なるエルサレムの住人であるシメオンは、救世主に会うまで死なないと預言されていた。彼がエルサレムの神殿で、ヨセフとマリアに連れられたキリストを見たとき、直感的にこの幼児が救世主であることがわかり、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり子の僕を安らかに去らせてくださいます」ではじまる有名な言葉を言った（『ルカによる福音書』2章22-35節）。そのさい、シメオンは、「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます。多くの人の心にある思いがあらわされるためです」とも言っているが、この言葉がここで言われる預言である。

¹³² ユダを指す。

¹³³ ペテロを指す。

¹³⁴ 罰されることを顧みずに、イエスの遺骸を引き取ったヨセフを指す。

¹³⁵ 『ゼカリヤ書』11章4-17節。神の命令で、ゼカリヤが神殿で鋳物師のために投げあたえた30シェケルの銀貨は、ユダがキリストへの裏切りのために受け取り、受け取られなかったにせよ神殿に投げつけた、かの30枚の銀貨の予型である。

¹³⁶ カイアファは次のように言っている。「一人の人間が民のかわりに死に、国全体が減びないですむほうが、あなたがたにとって好都合であるとは考えないか。」『ヨハネによる福音書』11章45-53節。

¹³⁷ 『エレミヤ書』において、牧者たち、すなわち、放牧者たちが主のぶどう畑を踏みにじり滅ぼしたと述べている。「多くの牧者たちが私のぶどう畑を滅ぼし、私の所有地を踏みにじった。私の喜びとする所有地を打ち捨てられた荒野とし、それを打ち捨てられて嘆く地とした。それは打ち捨てられて私のまえにある。大地は打ち捨てられ心にかける者もない。…麦をまいても、刈り取るのは茨でしかない。力を使い果たしても効果はない。彼らは収穫がなくてうろたえる。主の怒りと憤りゆえに。」『エレミヤ書』12章10-13節。キリルはこのイメージを、「神のぶどう畑」を滅ぼす「牧者」である祭司長カイアファの性格づけに用いている。

アフアはその年の大祭司であったからです。また、詩篇は彼らについてこう言っています。『俗界の支配者たちが主とその救い主に群がる。』¹³⁸ それから、ソロモンはこう言っています。『彼らは考えた挙句に、欺瞞をおこなった。なぜなら、悪意が彼らを盲にしたからだ。』そして、彼らはこう言ったのです。『義人を捕まえよう。嘲り傷を負わせ義人を苦しめよう。無意味な死によって義人を裁こう。』

このイエスの身体を引き渡すようにお願いいたします。イエスは、そなたの質問に答えて『私は生であり真実である』とおっしゃいました。『おまえは私を裁くいかなる権力も天からあたえられてはいない。』それがゆえに、そなたの妻は、イエスのためにおまえに懇願してこう言ったのだ。『この義人に何もしてはいけません。私はこの人ゆえに苦しい夢を見たのですから。』¹³⁹ 磔にされた方を引き渡してください。その方がエルサレムに入るとき、子ロバが枝でもってその方を出迎え、『ダビデの子にホサナ』と言いました。¹⁴⁰ その声を聞いて、地獄は、死んでから4日経っていたラザロの魂を手放しました。¹⁴¹ この方について、モーセが律法のなかでこう言っています。『あなたの方の眼前で危険にさらされたあなたの命を見るがよい。』¹⁴²

私はこの死んだ方の遺骸を望みます。母はその方を、夫を知らずに生み、処女のままでありつづけました。この方について、イザヤは言っています。『見よ、処女が身ごもり、息子を生む。その名は“インマヌエル（神はわれらとともに）”である。』¹⁴³ この方について、ダビデが預言しています。『私の腕と足を釘で打ち付けた。私の骨を数え終えた。』¹⁴⁴ 十字架のうえですでに死んだ方を私に引き渡してください。そなたは、この方の死を要求するユダヤ人たちに、『私はこの正しい人の血についてきれいだ』と言い、手を洗い、この殺害のためにこの方を引き渡しました。この方について、預言者は言っていま

す。『私は反駁もしないし、反論もしない。私は自分の肩を晒して傷つけさせ、私の頬を殴らせた。私は唾をかけられても私の顔をそむけなかった。』¹⁴⁵

私はこのナザレ人の遺骸を所望します。悪魔憑きから追い出されたとき、悪魔たちがこの方にこう言いました。『イエスよ、神の子よ、おまえは私たちにとって何か、私たちはおまえにとって何か。私たちはおまえが誰なのか、知っている。おまえは神の聖なる者だ。私たちを苦しめるために、時満ちずしてやってきたのだ』と。¹⁴⁶ この方がヨルダン川で洗礼を受けたとき、父なる神ご自身が天からこの方を証してこうおっしゃいました。『これは私の愛する息子である。この者に私は好意を寄せる。』¹⁴⁷ 聖霊が預言者イザヤを通してこう言われています。『子羊のように受難へと導かれ、無法なる人々によって死に引き渡された。』¹⁴⁸ 遺骸を私に降ろさせてください。私はこの方を私の墓所に葬りたいのです。なぜなら、この方について言われたすべての預言が成就されたからです。この方は、私たちの病を取り除き、私たちのために苦しみました。この方の傷によって、私たちすべてが治癒しました。なぜなら、この方の魂は死へと引き渡され、無法なる者たちの一人に数えられています。私たちは生きたる者たちの記憶から彼を拭い去り、その名前はけっして思い出されることはないでしょう。このゆえに、神はこの方の魂から痛みを拭い去り、この方に堅固なる者たちの力をおあたえになるでしょう。というのは、このように書かれているからです。『あなたは、あなたの契約の血のなかで、水のない堀から囚人たちを解放なさったからです。』

ピラトはこうしたことすべてをヨセフから聞いて驚き、百人長を呼び寄せて訊ねました。「磔にされたイエスは死んだのか。」このことを確認すると、ピラトはヨセフに遺骸を引き渡し、好きなように葬るがよいと言いました。

ヨセフは亜麻布を買うと、イエスの遺骸を十字架のう

¹³⁸ 『詩篇』2篇。「なにゆえ、地上の王は構え、支配者たちは結束して主に逆らい、主の油を注がれた方に逆らうのか。『我らは、枷をはずし、縄を切って投げ捨てよう』と。」詩篇の冒頭部分で、宗教的権威の桎梏を打ち破ろうと、神とキリストに結束して逆らう地上の支配者たちについて述べられている。詩篇では、このモチーフが繰り返し現れている。

¹³⁹ 『マタイによる福音書』27章19節。

¹⁴⁰ 『マタイによる福音書』21章1-11節; 『マルコによる福音書』11章1-11節; 『ルカによる福音書』19章28-44節; 『ヨハネによる福音書』12章12-19節。

¹⁴¹ イエスが死者のなかからよみがえらせたバタニアのラザロのことと考えられる（『ルカによる福音書』16章19-31節; 『ヨハネによる福音書』11章）。

¹⁴² 「あなたの命は危険にさらされ、夜も昼もおびえて、明日の命も信じられなくなる。あなたは恐怖を抱き、その有様を目の当たりにして、朝には『夕になればよいのに』と願い、夕には『朝になればよいのに』と願う。』『申命記』28章66-67節。

¹⁴³ 「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。』『イザヤ書』7章14節。

¹⁴⁴ 「犬どもが私を取り囲み、さいなむ者が群がって私を囲み、獅子のように私の手足を砕く。骨が数えられるほどになった私の身体を彼らはさらし者にして眺め、私の着物を分け衣を取ろうとしてくじを引く。』『詩篇』22篇17-19節。

¹⁴⁵ 『イザヤ書』からの引用と思われるが、かなり変容させられている。

¹⁴⁶ 『ルカによる福音書』4章31-37節。

¹⁴⁷ 『マタイによる福音書』3章16-17節; 『マルコによる福音書』1章9-11節; 『ルカによる福音書』3章21-22節。

¹⁴⁸ 『イザヤ書』53章4,5,12節。

えから降ろしました。ニコディムは、100グリヴナの値段がするミルラとアロエの混ぜ物をもってきました。ヨセフとニコディムは2人でイエスの遺骸に布を巻き、ミルラを塗りました。そして、ヨセフは叫んで言いました。

「キリストよ、沈むことのない太陽よ、万物の創造主にして被造物の主よ。そなたに恐ろしく仕える、天上の力もそなたに触ることができないというのに、どうして私がそなたの清らかな体に触れることができません。どうして、地を闇で包まれ天を雲で覆われるそなたを、私が布で覆うことができません。ペルシアの王たちが、そなたが全世界のために殺されるということをあらかじめ知り、神であるそなたに跪拝し、乳香とともに貢物をもってきた¹⁴⁹というのに、私はどのような香料をそなたに注ぎかけることができるのでしょうか。すでに高きにあつてセラフィムたちが止むことのない声でそなたのために歌を歌っているというのに、そなたがこの世を去ったことにたいして、どのような弔いの歌を歌うことができます。やがて朽ち果てる私の腕のなかに、すべての被造物を抱く見えない主を抱くことが、どうしてできます。どうして私は自らのみすぼらしい墓所に、そなた、自らの言葉でゆるぎないものとし、父と聖霊とともにケルビムのうえに身を横たえられる天の円環であるそなたを安置することができるのでしょうか。

ですが、すべては、そなたがあらかじめ定められたことにしたがって、なされておられるのです。すべてのことは、自らの意志によって耐え忍ばれたのです。なぜなら、そなたが地獄に赴かれたのは、自らの罪によって地獄に落ちたアダムとエバを、ふたたび樂園に引き上げるため、彼らとともにほかの死者たちを、そなたの神の力によって復活させるためだったのです。このように『聖なる神よ、聖なる力強き者よ、聖なる不死なる者よ、我らを憐れみたまえ』と大きな声を出しながら、慈悲深き者よ、私は聖霊に促されて、そなたを葬るのです。」

そしてかの方を墓所に葬り、墓所の扉に大きな石を置きました。¹⁵⁰ マグダラのマリアとヤコブの母マリア、2人はどこにあの方が安置されたのかを見たのです。そして、土曜日が過ぎ、太陽が輝くと、女たちはみな香料をもってやってきました。その回数は4度目となりましたが、はじめてマタイがこう述べています。「土曜日の夕

方、2人の女性が墓所を見るためにやってきた。すると、そのとき地震が起こって、天使が入り口の意味を退かせ、これに恐れおののいて番兵たちは死んだようになった。」この2人の女にイエスご自身が現われてこう言われたのです。「喜びなさい。2人は私の兄弟たちのもとに行き、ガリラヤに行くように、そこで私を見るだろうと伝えなさい。」そして、ふたたび真夜中近くになってほかの者たちが起こったことを確かめるためにやってきたのです。というのは、キリストの復活について、マグダラのマリアから聞いていたからです。これらのことについて、ルカは次のように言っています。「たいへん朝早く、女性たちが墓所にやってきて、石がすでにわきに転がされているのを見た。2人の天使が彼らのまえに立ち言った。『なぜあなたたちは生きた者を死者たちのなかに探すのですか。そのかたはここにはいません。復活なさったのです。』」

このあと、夜明けまえにほかの女性たちがやってきました。墓所のなか、前にイエスの遺骸が横たわっていたところに、2人の天使がいるのを見ました。このことについて神学者ヨハネはこう言っています。「彼らから聞いてペテロは、まだ暗闇だったころ、弟子たちとともに墓所に急いだ。」マルコは、土曜日に香をもってやってきた、こうした携香女について、こう述べています。彼らは墓所に入り、右側に座っている若者を見て恐怖に陥りましたが、この若者は彼らにこう言いました。

「恐れることはない。恐怖を感じなければならないのは、あなたたちではなく、ここを守る番兵たちをつけた無法な祭司たちである。あなたたちは墓所が空になっているのを見て使徒たちに告げるがよい。『キリストは復活した』と。見るがよい。身体がなく巻き布だけになったことを。イエスが肉体において復活したことを誉め讃えるがよい。人間が救済されたというよき知らせをもたらす者となるがよい。使徒たちに『今日、世界に救済がもたらされた』と言うがよい。」

もう悲しむことはありません。死んだ者たちを慕って嘆くことはありません。生きた神を思っ喜び楽しむがよろしいでしょう。私はあなたがたに人間への神の愛の秘密を教えたいのです。あの方は、倒れ朽ち果てたアダムのために苦しまれたのです。¹⁵¹ あの方は、朽ちたもの

¹⁴⁹ キリストが生まれたのち、星に導かれた東方の王（博士）たちが、ベツレヘムの星に導かれて嬰兒のまぐさ桶に導かれたことを指す。『マタイによる福音書』1章1-12節。

¹⁵⁰ 遺骸が盗み出され、イエスが死者から復活したとでっち上げられないように、ピラトの命令によって、墓には3日間見張りが立てられ、入り口は封印された。『マタイによる福音書』27章62-66節。キリルはこの記述には注意を払わず、2人のマリアが遠くから埋葬を見ていたと書いているだけである。墓所が石で閉ざされて封印され、イエスに見張りがつけられたが、イエスは封印を破らずに外に出て、番兵たちは恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。聴衆や読者は、これらの事件の叙事詩的基盤をよく知っているものと考えて、キリルはほのめかしだけで、つまり、様々な登場人物たちの評価のみによって、これらの事件を述べようとする。独白による叙述という形態と言外に何かを象徴させようとする構成のために、事実の基盤をあからさまに述べることを避けたのであろう。

¹⁵¹ キリスト教の教えによれば、キリストは、自らの死によって最初の間人アダムが犯した罪を贖うためにこの世にきた。

を新たにし、天に上げるために、天から降りられ、受肉し、人間になったのです。アダムは悪魔の助言を聞いて神になろうとして呪われました。この方は父にしたがひ、神から人間となり、蛇を打ち殺し、人間を神に近づけました。かの者は、手を禁じられた木に伸ばし、その木から死をもたらす果実をもぎ取り、罪の奴隷となり、エデンから地獄に降りました。キリストは十字架に身をゆだね、罪と死を運命づけられた人間を解放しました。

あの方が罪もないのに引き渡されたのは、罪のために悪魔に引き渡され奴隷に貶められた者たちを救い出すためでした。槍の先につけられた酢を漬した海綿から苦い汁を飲んだのは、人間の罪が数え上げられた罪の一覧を少しでも少なくするためでした。¹⁵² わき腹を槍で刺し貫かれたのは、人々が楽園に入ることを妨げる炎の剣を遠ざけるためでした。水に混ざった血がわき腹から流れ出たのは、肉体の穢れを洗い清めて人間の魂を聖なるものとするためでした。あの方は縛めを受け、茨の桂冠を被せられましたが、それは人間たちを悪魔の枷から解放し、悪魔の誑かしという棘を抜くためでした。太陽は暗くなり地は震え、すべての生きたるものは嘆きの淵に突き落とされましたが、それは地獄の貯蔵庫を打ち壊し、そこにいる魂が光を見ることができるようにするためでした。エバの嘆きを喜びに変えるためでした。死者として柩に横たわったのは、死んで柩に横たわってから久しい者たちに生命をあたえるためでした。巖に閉ざされ封印されたのは、地獄の門と門をその基礎にいたるまで破壊するためでした。

番兵が見張っていたことはみんなに見えていましたが、地獄に行きサタンを縛りあげたのは見えてはいませんでした。天使の軍勢があの方に寄り添い、駈けよってこう叫んだのです。「門よ、おまえの公たちを受け容れよ。誉れのツァーリが入場する。」牢獄の格子から縛られた魂を解き放つ者たちもいれば、悪魔たちを縛りあげる者たちもありました。「死よ、おまえの二股の舌はどこにある？ 地獄よ、おまえの勝利はどこにある？」茫然自失となった悪魔たちは、天使たちに叫びました。「これほどの威力をもって私たちのもとに来た、誉れのツァーリとは誰のことか。」あの方は闇の支配者を滅ぼし、その宝物庫からすべてを奪い取って、死の町である地獄の腹を打ち壊し、アダムとともにここにいた囚われ人たち、罪

人の魂を取り返しました。

自らの母の処女性の封印を破ることなくお生まれになったように、あの方は墓所の封印を破ることなく復活されました。ですから、あなたたちにはもう恐怖はないでしょう。ただ、死んだようになったあの見張りたちは別です。なぜならすでに、すべてをおこなったイエスは神の御心に叶うように復活され、あなたがたに先駆けてやってきた女たちに、「2人とも喜ぶがよい」と力強く叫んで、姿を現わされたからです。そして、イエスは使徒たちにガリラヤに行くように命ぜられました。ガリラヤの地でそなたたちみなを聖なる者にして、肉のまま天に昇り、肉のままふたたび世を裁くために来るためにです。

さて、ここまでで私たちは、キリストについて天使たちによって携香女に言われたことを、あなたがたに話してきました。

さあ、こんどは、永遠に記憶されるべき、水際立った振る舞いをした、奇跡と呼ぶに値するヨセフのことを讀えましょう。素晴らしい、奇跡と呼ぶのに値するヨセフよ、そなたは真にもって聖なる者です。地上においても、天上においても、かくのごとき恵みと偉大なる富にふさわしい者でした。この人はケルビムのように神の肉体にしかるべき仕え方をしました。ケルビムたちは目には見えないけれども、自分の両肩のうえに神の身体を担いだのですが、恐怖のあまり顔をそむけていました。だが、そなた、ヨセフは喜びに満ち自らの両手で神キリストを担いできました。

ヨセフよ、そなたは父祖アブラハム、イサク、ヤコブよりもさらに聖なる者です。というのは、彼らはその御声を聞いただけで名誉と誉れのなかですべての者より優る者になったのですが、そなたは亜麻布で神の身体を覆ったからです。ヨセフよ、私はそなたの両腕を讀えます。そなたの両腕で、神の息子にして万物の創造主の身体を抱き取ったからです。モーセはホレブの山で神の姿を見ることに耐えられませんでした。¹⁵³ 巖の下に隠れて、「おまえは私を後ろから見るだろう」という言葉を聞きました。このゆえに、タボル山でエリヤとともにキリストを見たとき、モーセはこの神は人間でもあるということを証言しました。¹⁵⁴

偉大なるヨセフよ、そなたはダビデ王よりも聖なる者です。ダビデはシロから神の言葉の入った聖櫃を運ぼう

¹⁵² 磔にされてから数時間たった後に、キリストは私は私と叫んだ。槍先に酢を含められた海綿を近づけられ、酢を口にすると、息を引き取った。兵士たちは槍でわき腹を突き、傷口からは血液の混ざったリンパ液（水）が流れ出た。『マタイによる福音書』27章33-34節；『ヨハネによる福音書』19章28-30節。処刑の光景を具体的に描くことで、キリルは贖罪の象徴的なイメージを展開している。

¹⁵³ モーセが若いころホレブの山で羊を放牧していたとき、燃え尽きることのない柴のなかから神の声を聞いた。モーセは神を恐れて両手で顔を覆った。『出エジプト記』3章1-6節。

¹⁵⁴ キリストは高い山（タボル山）に3人の使徒を連れていったが、彼らはそこでキリストが父祖エリヤとモーセと話しているのを見た。このイエスの変容は、使徒たちにキリストが神の息子であると確信させた。『マタイによる福音書』17章1-13節。

としましたが、聖櫃を自らの家に置くことを恐れました。¹⁵⁵ですが、そなたは契約の箱の入った幕屋ではなく、神ご自身を十字架から降ろし、喜びに満ちて自らの墓所に安置したからです。ヨセフよ、そなたによって掘られた墓は聖なるかな、祝福されたるかな。そこに私たちの救世主キリストが横たわったのですから。いまはもはや柩はありませんが、そのかわり、神の玉座、天の祭壇、聖霊の休み処、天の王の寝台があります。この寝台についてソロモンが言っていますが、まわりには、戦いの技にたけた屈強な兵士たちが両刃の剣をもって立っているのです。ソロモンは彼らを、キリストのために異端者たちとユダヤ人たちと戦う聖人たちと位置づけながら、こう言っています。

ヨセフよ、神の機密の遂行者よ、預言の実行者よ、そなたは聖なるかな。預言者たちがその方の契約のことをたとえ話で描き出してきた、まさにその方の聖なる傷にミルラを塗ってさしあげたのですから。ヨセフよ、そなたは聖なるかな。たった一言の言葉ですべてに生命をあたえ、天空を水で覆われたその方が死んだとき、3日後の復活に望みをかけ、柩のなかに安置し巖で覆いをしたのですから。そなたの町、アリマタヤは聖なるかな。その町からそなたは神の息子に仕えるためにやってきたのですから。

そなたの聖性にふさわしい、いかなる讃辞を私たちはそなたにささげることができましょう。この義人を誰に比すればよいのでしょうか。わたしはどうやってはじめ、どうやって続ければよいのでしょうか。

そなたは空と呼んだらよいのでしょうか。いいえ、この人は敬虔さにおいて空よりもはるかに明るいのです。なぜなら、キリストの受難のとき、空は暗くなり自らの光を隠しましたが、そなたは喜びに満ちて神をその両の腕に抱いたからです。

では、そなたを花咲く大地と呼んだらよいのでしょうか。いいえ、そなたは大地よりも敬虔にふるまいました。キリストの受難のとき、大地は恐怖で震えましたが、そなたは晴れ晴れとした気持ちでニコディムとともに、よい匂いのする亜麻布で神の身体をくるみ、それを安置したからです。

では、そなたを使徒と名づけたらよいのでしょうか。いいえ、そなたは使徒たちよりも信仰が深く勁かったのです。使徒たちはユダヤ人たちへの恐怖のために四散してしまったのに、そなたは恐れもなく疑いもなくキリストに仕えたからです。

では、そなたを聖職者、長老と呼んだらよいのでしょうか。何となれば、自分の務めの有り様によって、巡り歩き、香炉を振り、祈りとともにキリストの身体に跪拝し、「主よ、復活なさってください、私たちを助けてください、あなたの御名によって私たちをお救いください」と唱えることによって、そなたは聖職者や長老たちに範を示しているのです。

そなたを聖なる殉教者と呼びましょうか。そなたはキリストにたいするこれだけの愛を示したのですから。たしかにそなたの胸は武器に貫かれはしませんでした。たしかにそなたの血は剣から滴りませんでした。ですが、そなたはキリストへの愛と信仰になによりも魂を置く場所を見出しました。もしもそなたが打倒され、バラバラに切り刻まれたとしても、イエスがそなたを守り給うでしょう。なぜなら、イエスの遺骸を埋葬したときに、そなたはユダヤ人の怒りを恐れず、祭司たちの恫喝に屈せず、残酷な殺し方をした兵士たちに臆せず、自らの大いなる富を惜しいとは思わず、自分の命をも顧みず、ただ3日後の復活を信じていました。そうです。そなたは誰にもましてキリストへの信仰をもち、そなたを讃え、携香女たちとそなたの記憶を敬い、そなたの祝日を祝う私たちのためにも、キリストに祈りをささげていました。

聖なる者よ、私たちみなに助けをあたえてください。私たちの町をあらゆる悪から守り、公には敵たちにたいする勝利をあたえ、町を見える敵、見えざる敵から守る盾となってください。身体には平和と健康を、魂には救いを願ってください。あらゆる困窮、悲しみ、災厄、あらゆる悲惨な不幸から、私たちを救ってください。自らの神への祈りによって多くの罪が贖われますよう願ってください。主であり神である私たちの救世主イエス・キリストの恩寵と人間への愛により、ヨセフが私たちを永遠の業苦から私たちを救い、私たちを永遠の生の来たる恵みを受ける者としてくださいますように。父と、聖なる福なる命の源たる霊とともに、今も永遠にとこしなえに、イエス・キリストに誉れあらんことを。

病気で弱った者についての講話¹⁵⁶

この罪深き修道士の病気で弱った者についての講話。創世記と福音書の物語から。復活祭後の4番目の日曜日。

天の高さは測りがたく、地獄の深さは究めがたく、神

¹⁵⁵ シロからユダヤ人がペリシテ人と戦った合戦の場に、聖櫃（契約の箱）を運んだのは、ダビデではなくサムエルである。『サムエル記上』4章。ダビデが聖櫃を迎えたことにかんしては、『歴代誌上』13-15章。

¹⁵⁶ Слово о расславленном (Подготовка текста, перевод и комментарии Н.В. Поньрко) // БЛДР. Т. 4, С. 190-198, 615-616. По рукописи 13 в., РНБ, собр. Толстого, F.n.I.39, л.16-23; И.П.Еремин. Литературное наследие Кирилла Туровского // ТОДРЛ, т. XV. М.-Л., 1958, с. 331-335.

慮の秘密は知ることはできず、私たちが恵みを受けている、人類にたいするその慈悲は偉大で汲みつくしがたいものです。兄弟たちよ、私たちはそのゆえに、主なる神、救い主を賛美し、歌い、讃えなくてはならないのです。そして、主なる神、救い主が偉大なる奇跡を起こしたのですから、私たちはその偉大なる奇跡を真実のものとして語らなくてはならないのです。なぜなら、奇跡は、人間たちはもちろん、天使たちにも不可知なものだからです。

いま、病気で弱った者についてお話ししましょう。¹⁵⁷ この日、神ご自身が、医者たちが見放し、病人たちを池に浸からせる者たちが忘れ去ったこの人のことを覚え、すべてを見通し、憐れまれたのです。水が動くとき、彼らは富める健康な者たちのことを気遣い、この人のことを押しのけていたのです。ですが、いま、キリスト、人間を愛する恵み深い方は、言葉でこの人を治しました。キリストこそ、私たちの魂と身体の医師です。キリストの言葉は行為なのです。

福音書作者はこう言われています。イエスは、ユダヤの祭日であるプレポロヴェニエ（半分の日）の祭り¹⁵⁸のために、エルサレムに上られました。¹⁵⁹ あらゆる町々から多くの民が慣習にしたがって、エルサレムに集まりました。そのとき、主もやってきて、自らの僕たちを助け、言うことを聞かぬユダヤ人たちの狂乱を非難していました。真実に主は、迷える者たちを見出し、破滅した者たちを救うために来られたのです。

主はパレスチナ全土で多くの奇跡をおこなわれましたが、あの方を信ぜず、あの方の恩寵にたいして誹謗で応え、あの方を誘惑者だとか、嘘つきだとかと言いました。¹⁶⁰ このゆえに、あの方は多くの群衆が集まるなか、シルアムの貯水池にやって来ました。この貯水池はベトザタ、あるいは、羊の池と呼ばれていました。¹⁶¹ というのは、ここで犠牲に捧げられた羊の内臓を洗ったからです。この池のほとりに、5つの付属礼拝所がある神殿があり、そこに病気の人たち、跛、盲、そのほかの病気に苦しむ人たちが集まって、水が動くのを待っていました。なぜなら、主の天使が来て水を攪拌すると、その攪拌のあと最初に水に入った者が治癒したのです。¹⁶²

そして、これこそが洗礼の原イメージなのです。というのは、この水がいつも治癒を起こすわけではなかった

からです。天使が攪拌したときだけ治癒を起こしたのです。いまや洗礼の池には、天使の支配者である聖霊がやって来て水を聖化し、魂と肉体に健康を、罪には浄化を授けるのです。もしも誰かが理性において盲になったり、不信仰によって跛になったり、多くの無法のために絶望してひどくやせ細ったり、異端の教説のために弱ったりしても、洗礼の水がすべての者たちを健康にするのです。この池は多くの者たちを受け入れましたが、治癒することができるのは一人だけでしたし、それもいつもではありませんでした。それも一年に一度限りでした。洗礼という池は毎日たくさんの人々に命をあたえ、健康にしています。しかも、地のあらゆる場所から人々が洗礼のためにやってきたとしても、神の恩寵は減じることなく、罪という病気からみなを治癒しているのです。

主の恩寵についてお話ししましょう。主は羊の池にやって来て、病気のために弱った人間を見ました。この人は、長いあいだ床に横たわっていました。主はこの人に訊ねました。「健康になりたいか。」「主よ、もちろんです。ずっとまえから健康になりたいと思っていました。ですが、天使が攪拌したあとで私を池に入れてくれる人がいなかったのです。¹⁶³

もしもあなたが私の健康について訊ねてくださるのなら、私の答えをおだやかに最後まで聞いてください。あなたに自分の災厄と病気について話させてください。私は38年間、病に釘打たれて、この床に横たわっていました。私の罪が、私の身体の一つ一つの部位を衰弱させました。私の魂は死という裁きの以前に、罵りによって傷だらけになりました。私は神に祈りましたが、神はわたしの祈りを聞き入れてくださいませんでした。このために『私の罪悪は頭を超えるほどになりました。』¹⁶⁴

医者たちにすべての財産をわたしましたが、彼らから助けを得ることはできませんでした。なぜなら、神の罰を無にしてくれるほど強力な薬草はないからです。私の友人たちは私を嫌い、私が放つ悪臭は私から慰めを奪いました。私の近しい者たちは私のことを恥じ、この病のために私は、自分の兄弟たちの見ず知らずの他人になり果てました。すべての人間たちは私を呪いました。私を慰めてくれるような人はいませんでした。

私は自らを死人と呼ぶべきでしょうか。ですが、私の腹は食べ物を欲しますし、私の舌は渇きのために苦しみ

¹⁵⁷ 復活祭後4週目の日曜日は、一年の教会行事のなかで、ベトザタの池でイエス・キリストが病に苦しむ者を治癒したことを記念する祝日である。『ヨハネによる福音書』5章1-15節。

¹⁵⁸ 復活祭と五旬節までのちょうど半分の日、復活祭後の第4水曜日を指す。

¹⁵⁹ 『ヨハネによる福音書』5章1節;7章10,14節。

¹⁶⁰ 『ヨハネによる福音書』7章12節。

¹⁶¹ 『ヨハネによる福音書』5章2節;9章6,11節。

¹⁶² 『ヨハネによる福音書』5章2-4節。

¹⁶³ 『ヨハネによる福音書』5章5-7節。

¹⁶⁴ 『詩篇』38篇5節。

ます。それでは、私はまだ生きていると考えるべきでしょうか。ですが、私は床から起き上がることができませんし、自分の力で体を動かすことすらできないのです。私の足は歩くことができませんし、手は何か作業をすることができないばかりか、手探りで何か探すことすらできないのです。私は自分のことを埋葬されない死者であると思うことにしています。床は私の柩です。私は死者たちのなかの生者であり、生者たちのなかの死者です。なぜなら、私は生きている者として食べ物を食べますが、死んでいる者として何もできないからです。

私を罵る者たちの厚顔無恥により、私は地獄にいるかのごとき苦しみを被りました。私を嘲る子供たちにとっては、私は物笑いの種であり、老人たちにとっては、私は教訓を垂れる時の題材となります。すべての人々は私のことを笑いますが、そのことで私は2倍の苦しみを受けます。内からは病が私に爪を突き立て、外からは罵る者たちの侮辱が私を傷つけます。みなから唾を吐きかけられて、私はその唾まみれになっています。

もう一つの苦しみが私をとらえて離しません。飢えが病気以上に私を苦しめます。もしも食べ物を見つけることができたとしても、食べ物を手で口に運ぶことができません。みんなに私に食べ物をくださいと頼んでみますが、ときどきようやく生きていくことができるだけの、わずかなおこぼれがあるだけです。

私は涙に暮れて呻いています。病で苦しんでいます。誰も私を訪れてくれる人はいません。私はたった一人でひどく痛み、誰も私のことを見向きもしてくれません。たまたまここに神を畏れる人々の食卓の余り物が運ばれてきても、すぐに羊の池に張りついている者たちが駆け寄ってきます。ラザロのかさぶたを舐めた犬でさえ、これほど貪欲ではないでしょう。¹⁶⁵といいますのも、彼らは私のためにあたえられた喜捨でさえ貪り食ってしまうのですから。

私は私の面倒を見てくれる人に報いるだけの財産をもっていません。というのは、私は私が天国に行くためにあたえられたものを汚らしく蕩尽してしまいましたから。清浄さという衣装は、エデンの園の蛇によって盗まれてしまい、神の庇護を失ってここに裸で横になってい

るのです。¹⁶⁶私を嫌悪せずに私に仕えてくれる人はいません。エノクとエリヤはこの地上にはいません。彼らは炎の車輪でもちあげられて、神だけがご存知のところにいます。¹⁶⁷アブラハムとヨブはあるべき姿で私に少しだけ仕えてくれましたが、終わりなき生へと旅立っていきました。主よ、神のまえで忠実な人間はいないので。神に見(まみ)え律法をあたえた人、モーセはそのあとで神のまえで罪を犯し、約束の地に入っていくことができませんでした。¹⁶⁸賢いことこのうえないソロモンは、3度神と言葉を交わしましたが、老年にいたって神に背き、妻たちにおだてられて死にました。¹⁶⁹主よ、私を池に入浴させてくれる人はいないので。すべての人々は遠ざかり、助けてはくれません。善をおこなう者はおらず、だれ一人おらず、それをわかる者はおらずみなは無法をおこなっています。」

こういうことすべてを病に弱った者の口から聞くと、私たちの福なる医師であるイエス・キリストは病いに弱った者に言いました。「どうして人間はいないなどと、そなたは口にできるのか。私がそなたのために人間になったではないか。もの惜しみなく慈悲深い人間に。私が人間になるという誓いを、私は欺瞞で無にするなどということはない。『一人のみどり子が私たちのために生まれました。いと高き方の息子が私たちにあたえられた。この方が私たちの病氣と病いを持ち去るだろう。』¹⁷⁰

そなたのために私は天の王国の錫杖を捨て、低きにある者たちに仕えるために遍歴をしているのだ。私は仕えられるためにではなく仕えるために来たのだ。¹⁷¹そなたのために、肉体のなかった私は、肉をまとったのだ。すべての者たちの身体の病い、魂の病いを治癒するために。そなたのために、天使の軍勢にも見えなかった私は、人間として姿を現わしたのだ。なぜなら、私の姿に似せて作られたものが朽ち果てるさまを見たくはなかった。私はそれを救い、真実の理性に導きたかった。

そなたは『そんな人間はいない』と言う。私は人間になった。それは人間を神にするためだ。私は言った。『すべての者は神々となるのか、いと高き方の子になるのか』と。¹⁷²私以外のほかの誰が、そなたに忠実に仕えるというのか。私はそなたに役に立つようにすべての被造

¹⁶⁵ 『ルカによる福音書』16章21節。

¹⁶⁶ トゥーロフのキリルによれば、病に弱った人間というのは、アダムとエバから継承した原罪という重みを背負う人類を擬人化したものである。

¹⁶⁷ 洪水以前の敬虔なる父祖であるエノクとエリヤについて聖書は、彼らが天上に引き上げられる奇跡が起こり、死を知らなかったと伝えている。『創世記』5章24節；『列王記下』2章11節。

¹⁶⁸ ここで作者が念頭に置いているのは、モーセが神から約束の地に入るのにふさわしいものとされず、イスラエルの民が約束の地に入るまえに死んだという聖書の記事である。『申命記』34章4-6節。

¹⁶⁹ ソロモンは晩年にいたり唯一の神への信仰から逸脱し、異郷の神々への供犠をおこなった。彼の後宮には、700人の王妃と300人の側室がいたが、その大部分は異教徒の民の出身だった。『列王記上』11章1-43節。

¹⁷⁰ 『イザヤ書』9章5-6節。

¹⁷¹ 『マタイによる福音書』20章28節。

¹⁷² 『詩篇』82篇6節。

物を造ったのだ。天と地はそなたに仕える。天はお湿りによって、地は実りによって。太陽は光と熱となってそなたに仕える。そなたのために、雲は雨となって地に降り注ぐ。そなたにつかえるために、大地は、あらゆる種をはらむ草と果実を実らせ、樹木を茂らせる。そなたのために、川は魚をもたらし、草原は獣を育む。

それでもそなたは言うのか。『人間はいない』と。誰が私よりも忠実な人間であろうか。私は、私が人間になるという誓いを破ることはなかった。私はアブラハムに誓って言った。『そなたの胤によって、諸国の民は祝福されるであろう。そなたには、イサクから後裔が生まれるであろう。そこに受肉して、私は割礼を退け、洗礼によって多くの子らを産む生きたる水を造るであろう。』この水についてイザヤはこう言っている。『荒れ地に水が流れる。』¹⁷³

渇くなら、生きたる水へと赴け。私は生きた湖である。見よ、私は自らの口からそなたに生きた泉を注ぎかける。それなのにそなたはじきに干上がってしまう羊の池に、渇きの癒しを求めている。立ち上がれ。自らの床を上げよ。アダムが私の声を聞き、いまアダムがそなたとともに腐敗から新しくなるのを見るがよい。私はいま、そなたのなかにある最初のエバの罪の呪いを解くであろう。4日間死者のなかにあり、柩のなかですっかり腐敗したラザロを、私はたった一つの言葉でよみがえらせた。そしていまそなたに言う。『立ち上がれ。自らの床を担げ。自分の家に行け』と。¹⁷⁴

すると、病に弱った者はたちまち床から立ち上がり、力に満ちあふれて五体が健康になり、それまで自分が寝ていた床を担いで人々のなかを歩きはじめたのです。

その日はちょうど土曜日のことでした。ユダヤ人たちは彼を見ましたが、病人が健康になったことを喜ばず、その病の床から病に弱った者を立ち上がらせた神を賛美しようとしませんでした。「兄弟よ、おまえの血管や身体はどうやって頑健になったのだ」と訊ねようとはしなかったのです。獣が武器をもった人に向かうがごとく、あれらは駆け寄ったかと思うと立ち去って、岩に矢を射るがごとく、神を誹謗する言葉を吐き捨てながら、折れてしまったのです。彼らは真実を言うよりも、嘘を言うほうを好み、床を担ぐ者をこう言って咎めたのです。「今日は土曜日だ。床を担いでならぬ。¹⁷⁵なぜおまえは病の床から起き上がったのか。なぜ病氣から治ってしまったのか。なぜ病をやめてしまったのか。いまおまえが床を担ぐのはいけないことだ。」

病氣から治った者は彼らに言いました。「ファリサイ

人たちよ、おまえたちは何を言うのだ。おまえたちはそんなに賢いの、悪意のために不具になってしまったのか。おまえたちは38年間、床に横たわっていたことがあるか。いま、私は神の言葉で起きあがったというのに、おまえたちは自分の知によって盲になり、跛を引きながら自らの不真実に躓いたのか。私が立ちあがったのは善ではなかったにしても、悪ではないだろう。おまえたちがこの栄えある奇跡に喜ばなかったとしても、おまえたちは私にあたえられた健康を羨まないわけではあるまい。

おまえたちは、暴れ馬のように理性を失ってはいけない。主は病の床にいる私を助けてくださった。私のなかにあったすべての私の病は、健康に変わった。長老たちよ、イスラエルの裁き手たちよ、私に告げてくれ。おまえたちがそんなに悔しいと思って私を咎めだてするというなら、おまえたちのだれの家屋敷から、私の健康が盗み出されたというのか。私に健康があたえられたからと言って、おまえたちのだれ一人として侮辱を受けたわけではないし、おまえたちの誰からも何かが奪われたというわけではないだろう。私を治癒してくださった方は、私にこうおっしゃっただけだ。『立ち上がって自分の床を担ぎ歩け』と。¹⁷⁶すると、このように全身が健康になったのだ。」

学者たちは答えたのです。「おまえを治癒したのはいったい誰なのだ。」床を担ぐ者はそれがわかりませんでした。なぜなら、イエスは群衆を離れていたからです。床を担ぐ者は言いました。「魔法使いでもない。妖術使いでもない。使者でもない。天使でもない。イスラエルの神、主ご自身です。というのは、私に手で触りもしなかったし、私の四肢の傷に薬草を塗ったわけでもなかったのに、その方の言葉はたちまち現実となったからだ。あの方は私に言われた。『立ち上がって歩け』と。この言葉のあとで、事が起こったのだ。身体が健康になった。だからといって、その方を探し出して裁きにかけてはならない。神の恩寵を貶めてはならない。正しい裁きをおこなうがよい。『イスラエルで、そなたの事績は巨大になった』と神に告げるがよい。神の奇跡によってサバトを清めよ。神を讃えよ。祝日を飾れ。」

しかし、ユダヤ人たちは黙りませんでした。彼らは言いました。「安息日におまえを治癒した者は誰だ。安息日に床を担げと命令した者は誰かを吐け。」

イエスは教会のなかでふたたび彼を認めて、この者にこう言いました。「おまえは健康になった。このうえは罪を犯すな。おまえのうえに悲しみが降りかからぬように。」

私たちは、キリストがこのことをこの者だけに言った

¹⁷³ 『イザヤ書』35章6節。

¹⁷⁴ 『ヨハネによる福音書』11章1-44節。

¹⁷⁵ 『ヨハネによる福音書』5章10節。土曜日はサバト、すなわち、ユダヤ教の安息日。

¹⁷⁶ 『ヨハネによる福音書』5章10節。

とは思わないほうがよいですね。洗礼の恩寵を受けとった私たちはみんな、父祖代々の穢れから清められ、私たちを朽ち果てさせる罪から治癒したのですから。主はこの治癒した者にたいしてかくのごとく言ったかのようです。

「見よ。私はおまえたちのなかにあるアダムの腫れ物を治癒した。墮罪によって倒れた者を引き上げた。アダムのためにすべての人類を覆った呪いを取り除けた。洗礼によってあらゆる罪の穢れを洗い落とした。災いなる偶像崇拜の道を行こうとする者を探して見つけ出し、悪魔という強盗に傷つけられた傷口に包帯を当て、私の血であるぶどう酒と油を傷口に注ぎかけた。一頭の家畜に自らの身体を乗せ、宿屋へと、つまり、聖なる教会へと連れていった。そして、宿屋の主人に2枚の銀貨をあたえた。¹⁷⁷ 聖職者たちに、心を込めて人々を教え導くように、古い契約と新しい契約とをあたえたのだ。私が帰ってきたら、私が救った罪人たちに褒賞を与えようとも私は約束した。見よ、おまえは健康になった。このうえは罪を犯してはならない。というのは、理性のなかで罪を犯した者には、ただ不幸だけがあるからだ。」

この言葉の威力を肝に銘じてください。主は、洗礼のあとにはもう罪を犯してはならないとおっしゃっているのです。神によって新しくなった人間を再び墮罪に導くことはあってはならないからです。どんな者であっても聖職を引き受けたからには、罪を犯してはなりません。罪を犯す者に災いあれ。修道士であれ、司祭であれ、主教自らにあっても、神を恐れぬ者に災いあれと私は言っているのです。

ところで、この人間には、信仰がありました。なぜなら、治癒のあとに肉体の穢れには身をゆだねなかったからです。ユダヤ人のまえでイエスをあしざまに言うことなく、イエスが彼を見出した教会にいました。そして、この者は自分を治癒した者を認めてこう言いました。「主よ、そなたは正しい方です。そなたの言葉は真実です。いまから、そなたを恐れ、そなたの教えを守るすべての者たちにたいして、心を分かち合うものとなるでしょう。」そして、この者は行って諸国に「私を治したのはイエスである」と告げ広めたのです。¹⁷⁸

兄弟たちよ、私たちはイエス・キリスト、私たちの神、私たちが罪の病から治癒された方を讃えましょう。信仰をもってこう言いながら、あの方のまえに倒れ伏しましょう。「私たちのかつての無法を覚えなくてください。いま現在の罪を清めてください。天の者たち、地の者たち、あなたはすべての者たちの神です。人間の造り主よ、天使たちの造り手よ、ケルビムたちの造形者よ、セラフィムたちの飾り手よ、全世界の王よ、大天使たちの主

人よ。あなたに望みをかけ、あなたのために救われた私たちをお憐れみください。父と聖霊とともにあなたを讃えます。いまでも永遠にとこしえに。」

¹⁷⁷ ここでキリルは、福音書の慈悲深いサマリヤ人の喩え話を用いてイエス・キリストの受肉による救済の神慮について比喩的に語っている。『ルカによる福音書』10章30-35節。

¹⁷⁸ 『ヨハネによる福音書』5章15節。